御所市文化財調査報告書　第24集

台風7号被害による

室宮山古墳出土遺物

平成11年（1999年）3月

御所市教育委員会

例　言

1. 本書は、平成10年(1998年) 9月22日に近畿地方一円を襲った台風7号により、奈良県御所市室に所在する国史跡、室宮山古墳において生じた、風倒木の根に絡まって出土した遺物の報告書である。
2. 台風直後の応急処置は御所市教育委員会が単費で行ったが、被害規模が甚だしいことから国宝・重要文化財保存整備費補助金を申請し、史跡宮山古墳保存修理事業（災害復旧）として平成11年(1999年)2月8日から26日まで復旧作業と遺物の回収を行った。また、遺物整理と報告書の印刷は市内所在遺跡発掘調査費補助事業による。
3. 本書の執筆・編集は、御所市教育委員会技術職員　藤田　和尊と同　木許　守が適宜分担して行った。遺物整理・本書作成には藤田、木許のほか、藤村藤子・尾上昌子・楳原静代・藤井静代と、鬼頭彰(関西大学大学院)、相見梓・阪本晋通(奈良大学)、川口奈穂子・荻野亜衣(関西大学)があたった。
4. 製図は大半を藤村藤子が行い、遺物の撮影は大半を相見梓が担当した。
5. 出土遺物実測図、同図版写真の縮尺は、1／1、1／2、1／3の整数比とし、文中の遺物番号は、挿図・図版中の番号とも全て統一した。
6. 本書の作成に際しては、河上邦彦氏、定森秀夫氏をはじめ、下記の方々から貴重なご教示を賜りました。御芳名を記して深謝いたします(五十音順、敬称略)。

   網干善教、石野博信、石部正志、一瀬和夫、伊藤雅文、上田睦、奥田尚、神谷正弘、亀田修一、北野耕平、小田富士雄、金昌鎬、申敬澈、武末純一、竹谷俊夫、田中晋作、塚口義信、西谷正、坂靖、土生田純之、堀田啓一、森岡秀人、吉井秀夫、柳昌煥
7. 巨勢山303号墳においても台風7号による墳丘上の倒木のために遺物が出土した。同様の経緯に因るので刊末に付載する。この稿については木許と相見梓が執筆を担当した。また、遺物の製図は鬼頭彰による。

本文目次

第１章 既往の調査 …… 1

第２章 契機と経過 …… 3

第３章 遺跡の出土状況 …… 4

第４章 出土遺物 …… 8

Ａ地点（後円部円丘壇東端）…… 8

Ｂ地点（後円部北石室直上）……25

Ｃ地点（後円部石室西）……28

Ｅ地点（後円部北東斜面）……28

Ｆ地点（鞍部前方部寄り南端）……31

第５章 遺物帰属位置の推定 ……34

第６章 総括 ……36

付載 巨勢山303号墳出土の遺物 ……47

挿図目次

図１　室宮山古墳位置図（Ｓ.＝1／50,000）……1

図２　室宮山古墳　後円部円丘壇付近測量図（Ｓ.＝１／400）……5

図３　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土円筒埴輪（その１）（Ｓ.＝1／３）……10

図４　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土円筒埴輪（その２）（Ｓ.＝1／３）……11

図５　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土円筒埴輪（その３）（Ｓ.＝1／３）……12

図６　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土円筒埴輪（その４）（Ｓ.＝1／３）……13

図７　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土円筒埴輪（その５）（Ｓ.＝1／３）……14

図８　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土円筒埴輪（その６）（Ｓ.＝1／３）……15

図９　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土形象埴輪（その１）（Ｓ.＝1／３）……16

図10　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土形象埴輪（その２）（Ｓ.＝1／３）……17

図11　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土形象埴輪（その３）（Ｓ.＝1／３）……18

図12　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土形象埴輪（その４）（Ｓ.＝1／３）……19

図13　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土陶質土器（その１）（Ｓ.＝1／１）……21

図14　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土陶質土器（その２）（Ｓ.＝1／3）……24

図15　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土鉄剣　（Ｓ.＝1／３）……24

図16　Ｂ地点（後円部北石室直上）出土埴輪　（Ｓ.＝1／３）……26

図17　Ｂ地点（後円部北石室直上）出土竜山石　（Ｓ.＝1／３）……27

図18　Ｃ地点（後円部石室西）出土緑色凝灰岩（グリーンタフ）（Ｓ.＝1／１）……27

図19　Ｃ地点（後円部石室西）出土緑色凝灰岩（グリーンタフ）（Ｓ.≒1／１）……29

図20　Ｅ地点（後円部北東斜面）出土埴輪　（Ｓ.＝1／３）……30

図21　Ｆ地点（鞍部前方部寄り南端）出土円筒埴輪（その１）（Ｓ.＝1／３）……32

図22　Ｆ地点（鞍部前方部寄り南端）出土円筒埴輪（その２）（Ｓ.＝1／３）……33

図版目次

図版１　１．台風直後の墳丘（南から）
　　２．後円部頂部の状況
図版２　１．後円部北主体部周囲の状況
　　２．前方部頂部の状況（後円部側から）
図版３　１．Ａ地点（後円部円丘壇東端）の埴輪列
　　２．Ｆ地点（鞍部前方部寄り南端）の埴輪列
図版４　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土　円筒・朝顔形埴輪（その１）
図版５　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土　円筒・朝顔形埴輪（その２）
図版６　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土　円筒・朝顔形埴輪（その３）　および壺形埴輪
図版７　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土　衣蓋形・家形埴輪
図版８　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土　盾形埴輪
図版９　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土　靫形・甲冑形・鳥形埴輪
　　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土　鉄剣
図版10　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土　陶質土器（その１）
図版11　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土　陶質土器（その２）
図版12　Ａ地点（後円部円丘壇東端）ほか出土　白色円礫
図版13　Ｂ地点（後円部北石室直上）出土　埴輪
図版14　Ｂ地点（後円部北石室直上）出土　竜山石
　　Ｅ地点（後円部北東斜面）　出土　埴輪
図版15　Ｆ地点（鞍部前方部寄り南端）出土　円筒・朝顔形埴輪（その１）
図版16　Ｆ地点（鞍部前方部寄り南端）出土　円筒・朝顔形埴輪（その２）
図版17　巨勢山303号墳　墳頂部の風倒木と遺物出土状態
　　巨勢山303号墳出土　須恵器

第１章　既往の調査

室宮山古墳は、御所市域のほぼ中央に所在する。墳丘長238ｍの威容を誇る、大形の前方後円墳である。墳丘は、その南の巨勢山丘陵から北に延びる尾根の丘尾を切断することで形成している。

墳丘の北側に周堤の痕跡が今も残るが、周堤のこの部分は現在の国道309号線として利用されている。また、古墳の西300ｍ程の地点を南北に国道24号線が走る。国道309号線は、西に向かえば、水越峠を経て河内に至る。一方、国道24号線は、五條市域を経て紀伊に至るルートであって、室宮山古墳は、まさにその交差点付近に当る交通の要衝に立地している。

室宮山古墳は、大正10年(1921年)に国指定史跡に指定されるが、その本格的な調査・研究は、その翌年に発表された梅原末治氏の「大和御所町附近の遺蹟」(梅原1922) に始まる。

梅原氏は、この報文中に墳丘の外形の観察結果を記されるとともに、平・断面の見取り図を示された。さらに、明治41年に前方部を耕作中に木棺材と思われる木片とともに出土したという、鏡・玉・石製品について報告されている。梅原氏はこれらの遺物について、藤田亮策氏の観察に基づくとされながら、鏡は少なくとも11面の存在が推定できることなどを指摘された。

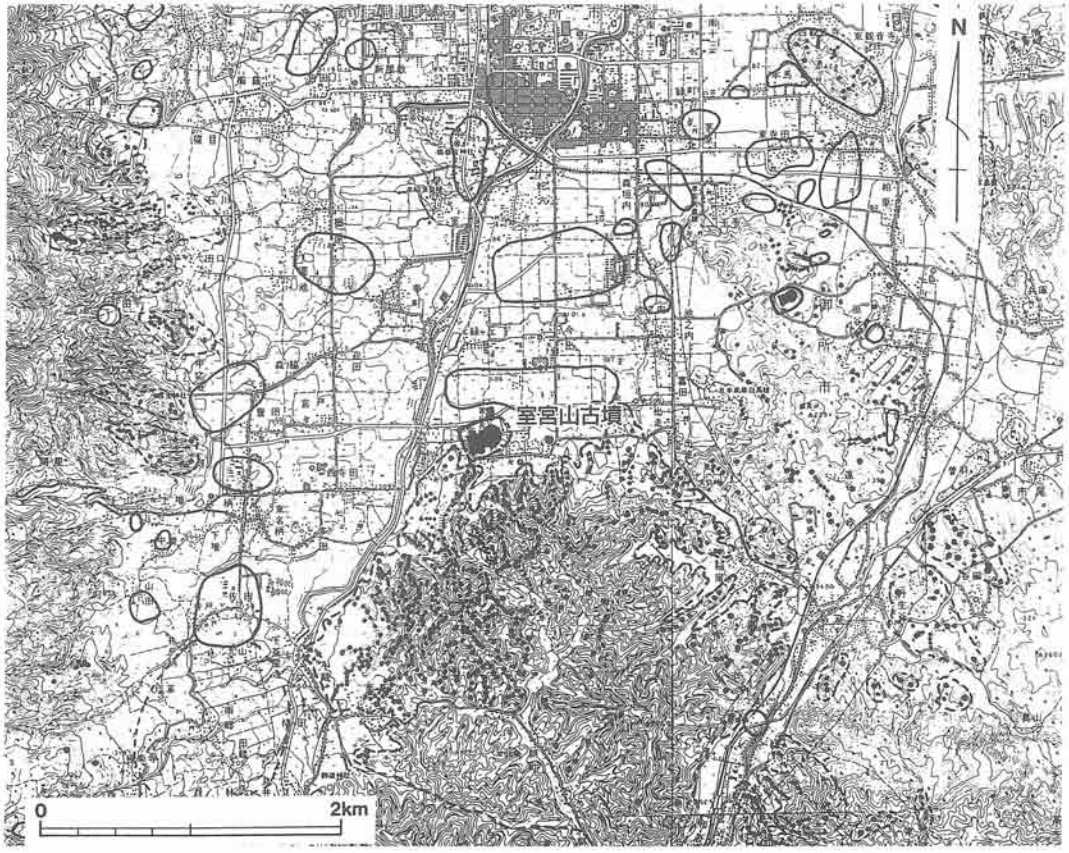


図１　室宮山古墳位置図（Ｓ.＝1／50,000）

本墳に関する調査・研究は、その後一旦停滞するが、その間戦時中に前方部が開墾による攪乱を受け、昭和25年（1950年）には、後円部主体部の盗掘事件が起きる。

本墳における最初の発掘調査は、この盗掘事件を契機に実施された。この調査(秋山・網干1959)によって、後円部頂部に中軸を挟んで南北に2基の竪穴式石室が存在することが明らかになった。そのうち南石室について発掘調査が実施され、長持形石棺が収められていることが明確になった。また、この石室の各々の周囲には、靫形・盾形・短甲形やその他多彩な形象埴輪が方形に巡り、南側石室の埴輪列のさらに南側には家形埴輪5個体が配置されていることなどが明らかにされた。

また、その報告書には、戦時中の開墾によって出土したという、高野槇製の木棺材とみられる板材についても述べられている。その出土位置は前方部頂上部より南西寄りの地点にあたるが、先に11面以上の漢式鏡が出土した主体部との関係は不明であるとされる。

昭和46年（1971年）には、前方部北側辺に取り付く張出部の発掘調査が実施され(泉森・河上1971)、張出部頂部に木棺長8.6mと推定される、長大な粘土槨が検出された。また張出部そのものについても、築造当初から計画された2段築成のものであることを明らかにされた。出土遺物のうち、短甲片・鉄鏃・鉄刀などは報告（木許・藤田1996）した。

この張出部に関しては、平成7年(1995年）に、西辺にあたる個所の1段目テラス部分と埴輪列の一部を検出し、張出部の北に延びる方向などを確定することができ（木許・藤田1996)、木許はこれらの成果などから古墳全体の墳丘復原案を示した（木許1996)。また、東辺部で行った発掘調査（平成9年、御所市教委実施）でも同じく埴輪列の一部が検出された。

墳丘の外側の調査としては、1989年（平成1年）に北側の周堤部分で発掘調査が行われた(関川1989)。この調査では、古墳が立地する地点の旧地形が明確にされ、周堤は谷地形を地山掘削土で埋め立てて造られる大規模な土木工事を伴うものであったことが明らかにされた。

また、北側周堤に接して、方墳である陪冢ネコ塚古墳が存在する。前記の梅原氏の報告文（梅原1922）には、明治21年ごろに発掘されて、竪穴式石室が見出され、鉄器が存在した旨記されている。表面採集資料に緑泥片岩や刀剣類、鉄鏃、三尾鉄、三角板革綴短甲、頸甲などがあり（藤田1985)、その主体部と副葬品内容の一端を知ることができる。

ネコ塚古墳の墳丘については、関川氏が、墳丘測量図を示されたうえで、高さ約10m、一辺70mほどと推定できるとされた（関川1989)。ネコ塚古墳の北側裾部付近で行った発掘調査の結果（木許1990)からも、示された数値は正しいものであると考えられる。

このほか、平成6年（1994年）度には国庫・県費の補助を受けて室宮山古墳の環境整備事業を行い、階段やガイダンス施設を設置したが、その過程で株式会社相互技研に委託して、墳頂部について1／100の墳丘測量図を作成した。本書の図2はその成果を元にしたものである。

また、墳丘および周堤の周辺部で、個人住宅の建て替えなどに伴う小規模な試掘・立会調査をその都度行っており（木許・藤田1996ほか)、室宮山古墳の周辺部の旧地形が徐々に判明しつつある。

第2章　契機と経過

平成10年（1998年）9月22日、紀伊半島を襲った台風7号は、奈良県下では、死者を含めた人的被害のほか、家屋・通信・交通網などに甚大な被害をもたらした。文化財においてもその例外ではなく、県内では、国宝・重要文化財をはじめとする建造物への被害が大きく報道された。御所市では、重要文化財高鴨神社本殿の屋根の一部が破損し、同じく重要文化財安楽寺塔婆で自動火災報知器発信機やその電線を設置していたポールが倒壊し、報知器が機能しなくなった。

そして、この史跡室宮山古墳では、墳丘上の樹木200本以上が、根こそぎ倒れ、深さ約0.3～1m程度の窪みが墳丘上の至るところに生じていた。

室宮山古墳については、このような被害状況の大略を9月24日に現地にて確認し、直ちに奈良県文化財保存課記念物係に報告した。そして改めて9月30日に文化財保存課課長補佐、係長および当市担当職員が現地で状況を確認し、今後の対応を協議した。

このとき、図2－A地点(後円部円丘壇東端)で、木の根に絡んで円筒埴輪の基底部が最低でも3個体が並んでいる状況を確認した。本来この場所に樹立された円筒埴輪が、木が倒れたときに根に絡んで並んだ状態のままで持ち上げられ移動し、その基底部を露わにしたものである。周辺には、それ以外の埴輪片多数のほか白色円礫などが散乱していた。

この時点で、これらの事態を現状で放置することは、古墳の保全上、著しく不都合であることが明らかであった。県文化財保存課からは、倒れた木の処理および遺物の回収のために国庫・県費補助事業として予算化を行うこと、遺物は原位置を移動し散乱しているものについて採集すること、遺物出土地点の記録を作成することなどの指導を得た。

ところが、翌10月1日に再び古墳を訪れたところ、前日に確認した、円筒埴輪の基底部が何者かに持ち去られていることが判った。その間わずか半日の出来事であった。誠に遺憾である。ただ、目立っていた埴輪は盗掘されていたものの、なお多くの遺物が現地に散乱している状態であった。また、窪みの底には、木が倒れるときにも移動しなかった埴輪が土砂に隠れて存在している可能性があった。このようなことで、早期の対応を図るべく、まずA地点(後円部円丘壇直上)などを中心として、10月8日に遺物の採集を行い、その後も折りをみて遺物の回収作業を実施した。

そして先述のように、国宝・重要文化財保存整備費補助金を申請し、史跡宮山古墳保存修理事業として平成11年（1999年）2月8日から26日まで復旧作業と遺物の回収を行った。この時までは、前方部の被害の詳細について把握しがたかったが、その後、図2－F地点(鞍部前方部寄り南端)についても、A地点と同様に木の根に絡んで埴輪の基底部が並んでいることを確認したので、引き続いて、図2－A～E地点とともに遺物の採集を行った。

第３章　遺物の出土状況

室宮山古墳は、３段築成の前方後円墳である。後円部は、その最上段に円丘壇が造られ、ここに２基の竪穴式石室が構築されている。今回、この円丘壇について現況測量図（図２）を掲載することができた。この測量図によれば、円丘壇は、南側ではやや崩れが目だつものの、それ以外の場所ではよく旧地形を保っているようである。円丘壇の規模は、基底部径38ｍ、上面の直径30ｍ、高さ2.5～３ｍ、壇基底部外側平坦面の幅３ｍを、それぞれ測る。

今回、墳丘上の６箇所で遺物を採集したが、そのうち４箇所は、この円丘壇上にあたる。後円部北東斜面の１箇所と鞍部前方部寄りの１個所を併せてその位置を図２に網掛けで示し、Ａ～Ｆ地点との名称を付した。

いずれの地点においても、木の根が大きく起き上がってそこに絡まった状態で遺物が散見され、その窪みにはこのときの攪乱土が流れこんでいた。

そこで、この度の遺物採集は、墳丘の新たな掘削などは行わないで、木の根に絡んでいた土をできるだけ落として遺物を採取し、窪み内の攪乱土も一旦排出して、遺物の選別を行って土だけを埋め戻すことにした。したがって、今回採取し以下に報告する遺物は、すべて木の根に絡んでいたものかその部分の攪乱流入土に含まれていたものである。

最も多くの遺物が出土したのは、Ａ地点(後円部円丘壇東端)であった。ここにできた窪みは、最も規模が大きく、現地表の上面で、長さ約3.5m、幅約2.7mで、深さは約1.1ｍであった（図版３）。

窪みの埋土は、すべて攪乱土で暗褐色砂質土であった。この攪乱土を除去すると、現地表面から1.1m下がったところで、明黄褐色砂質土により成る面が検出された。この面は古墳の盛土の上面にあたる。

この面に立てられた状態で円筒埴輪の基底部が出土した。Ａ地点の網掛け部の中に●で示した。残念ながら、その直上や周囲に至るまで木の根による攪乱が及んでいたために、埴輪の据付にかかる溝などの遺構の詳細については明らかにし得なかった。しかしながら、その出土状態から、この埴輪はほぼ原位置を保っているものとみられる。

このような状態で検出できた埴輪はこの１個体のみであったが、前述したように、台風直後の盗掘のために詳細は明らかにできなかったものの、Ａ地点においては、起き上がった木の根に絡んで並んだ状態の埴輪が認められ、その状態から、元はこの円丘壇の縁辺部にほとんど隙間無く円筒埴輪が立て並べられていたと考えられる。

なお、原位置を保ったこの埴輪については、今回は攪乱坑の底での検出であって、周囲の状況に不明な点が多いこと、攪乱土の中に別個体の円筒埴輪底部が存在し、資料としては一応得られたことなどから、現地に残しておくのが適当と判断し、写真撮影の後その場に埋め戻した。

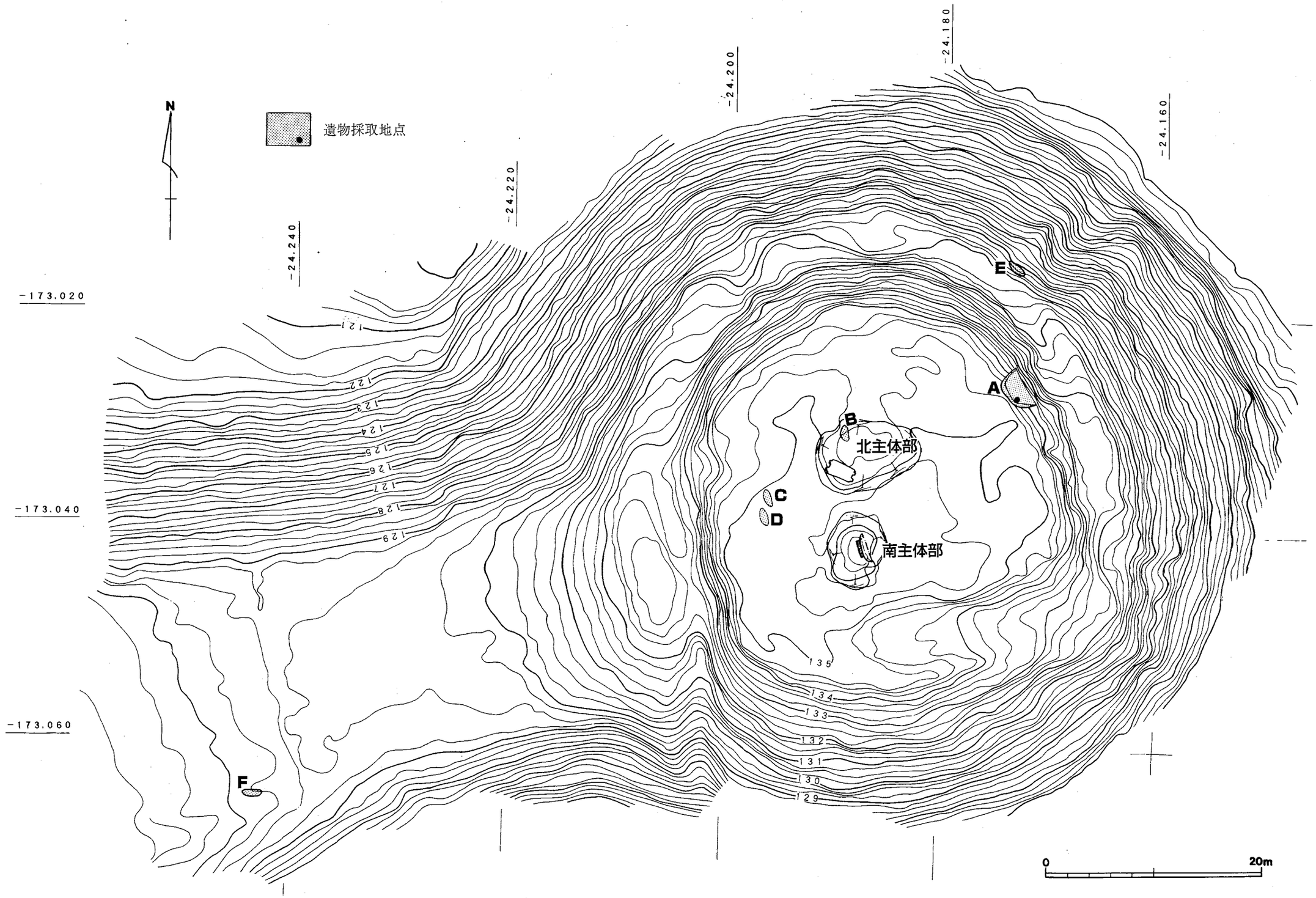


図２　室宮山古墳　後円部円丘壇付近測量図（Ｓ．＝１／400）

この1個体の埴輪以外の遺物は、すべて木の根に絡むなど攪乱土に混入していたものである。円筒埴輪および形象埴輪（コンテナ３箱）、陶質土器片４個体分、鉄剣片１のほか、白色円礫[補註1]816個（約33kg）、緑色片岩約10kg、閃緑岩約３kgが出土した。白色円礫は長径５㎝程度のものが最も多く、大きいものでも長径10㎝弱である。緑色片岩は長辺20～25㎝程のものも含まれるが、多くは細かく割れている。閃緑岩は拳大かそれよりは小さいものが主体である。

Ｂ地点（後円部北石室直上）にできた窪みは、長径1.7m、短径0.7m、深さ約40㎝を測る。

北石室にあたる部分は、以前から、石室内に墳丘土が流入したことによって生じた、長さ4.7m、幅3.5mの陥没がある。この部分の石室天井石とみられる石材は、縄掛突起を有する閃緑岩の板石が残るのみで、その他はすでに持ち去れているかに思われるが詳細は不明である。

Ｂ地点は、この陥没内の北端部に当る。その攪乱壁面にわずかに緑色片岩の板石がのぞいていて、石室の北側壁面に相当することが伺えた。

出土した埴輪片は、図化不可能な細片も含めて40点ばかりがあったが、そのほとんどは形象埴輪であった。石材は、白色円礫31個（約１kg）、緑色片岩約10.5kg、閃緑岩約４kg・竜山石[補註2]約２kgが出土した。それぞれの石材の大きさなどの状態は、白色円礫はA地点(円丘壇東端部)で出土したものとほぼ同様であるが、緑色片岩と閃緑岩についてはB地点(後円部北石室直上)で出土したものの方がやや大きい傾向がある。竜山石は大きいものでも一辺15㎝強で、多くは5㎝以下に割れていた。

これらのほか後円部頂部の平坦面では、後円部石室西のＣ・Ｄ地点で遺物を採集した。

うち、北側のＣ地点の窪みは長径1.8m・短径0.7m、深さ約0.4mであった。他の地点と同様に攪乱土中から、部位不詳の埴輪片３点、白色円礫７個（0.5kg）、緑色片岩約0.15kg、閃緑岩約1.6kgが出土したが、特筆すべきこととして、これらとともに緑色凝灰岩（グリーンタフ）13片（合計約180ｇ）が出土した。製品化される前の状態の良質とはいえない原石で、それぞれ長径２～７㎝程度に割れており、原石面を見せているものもある。

その南側のＤ地点の窪みは長径2.0m、短径0.8m、深さは約0.4mであった。遺物は、部位不詳の形象埴輪と思しき埴輪片３点、白色円礫5個(約0.5kg)、閃緑岩約３kgがあった。石材の大きさや出土状態は他の地点と同様である。

Ｅ地点(後円部北東斜面)は、後円部３段目斜面の頂部付近にあたる。長径２m、短径0.9m、深さ0.5m程の窪みが生じ、その攪乱土から、埴輪片20数点が出土した。埋土の状態などはその他の地点と同様であった。

F地点（鞍部前方部寄り南端）では、長径1.9m、短径0.7m、深さ0.5mの窪みが生じ、A地点と同様に、大きく起き上がった木の根に絡んで、埴輪４個体が隙間無く並んで出土した（図版３）。次章に実測図を掲げた４個体の底部がそれにあたるが、このほか、これらの底部と同一個体であるものの接合できなかった破片を含む、埴輪片80点ばかりが出土したが、その中に、朝顔形埴輪の口

縁部破片１点があった。4個体の底部のうちには本来朝顔形であったものが含まれている可能性がある。また、それら破片には、形象埴輪とみられるものはなかった。

第４章　出土遺物

A～F地点の順で出土遺物の報告を行う。埴輪の調整や胎土については観察表に拠られたい。

埴輪の胎土の観察は、『六条山遺跡』（寺沢編 1980）で創設され、『矢部遺跡』（寺沢編 1986）でさらなる発展を遂げた方法を、当市の報告書では『楢原遺跡Ⅰ』（藤田 1994）、『楢原遺跡Ⅱ』（木許 1994）、『室宮山古墳範囲確認調査報告書』（木許・藤田 1996）に引き続き援用し、使用した顕微鏡も同機種のナショナルライトスコープFF－393(×30)である。

ただし、胎土類型については一定の研修を経た後でなければ『矢部遺跡』と同一の基準で認定することは困難であるし、同一人物が短期間で『楢原遺跡Ⅰ』以降の土器や埴輪を全て観察したうえでこの度の観察を行えば、観察基準の平均化もある程度図られようが、これも果たせていない。

ここでは特に、『室宮山古墳範囲確認調査報告書』（木許・藤田 1996）で報告した埴輪の胎土観察結果との擦りあわせが問題となる。この度の観察は、報告書刊行までの期間に余裕がなかったために分担して行い、原則として、円筒埴輪を木許が担当し、形象埴輪を藤田が担当した。

同一人物による観察ではなく、これだけで大きな誤差(基準の非平均化)が生じることは間違いないが、それでもなお、この度観察した埴輪では、角閃石はMないしS－３のものが多くみられ、上記『室宮山古墳範囲確認調査報告書』の埴輪の場合、S－１ないし２であったから、その状況とはかなり異なっていることが判った。同一古墳とはいえ、上記報告書の埴輪は前方部北張出部で出土したものであるに対して、この度の埴輪はいずれも墳頂部付近で出土したものと、樹立の場所が大きく異なることが要因とみられる。

ただし、先述の事情で、円筒埴輪と形象埴輪の胎土観察結果の間には基準の平均化が図られていないので、その両者間に何らかの相違がある場合には、今は不問としていただきたい。いずれ機会を得て、室宮山古墳の出土埴輪全体として、整合性のある観察結果を報告する所存である。

なお、本文および観察表で用いた、円筒または朝顔形埴輪の外面調整の分類は一瀬和夫氏（一瀬 1992)に、タガ断面形態・「底部の調整」および円筒埴輪口縁部形態の分類は上田睦氏（上田1997）に、それぞれ従った。

A地点（後円部円丘壇東端）

A地点では、円筒埴輪および形象埴輪(コンテナ３箱)、陶質土器片４個体分、鉄剣片１のほか、

白色円礫816個(約33kg)、緑色片岩約10kg、閃緑岩約3kgが出土した。以下、円筒埴輪、形象埴輪、陶質土器、鉄剣の順で図示して報告する。

なお、陶質土器のうち2個体については、河上邦彦氏のご厚意により『青陵』第101号（橿原考古学研究所1999）に写真と図面を掲載し、速報することができた。また、その過程で、出土の陶質土器について河上邦彦氏と定森秀夫氏から貴重なご教示を賜った。記して深謝いたします。

1．円筒・朝顔形・壺形埴輪

図化可能であった28個体を図3～8に示したが、このほかコンテナ1杯分の破片がある。

A地点で出土した円筒または朝顔形埴輪は、30個体分ほどがあるとみられるが、そのいずれもが有黒斑またはそれと推定できるものである。

タガの形状が判るもののほとんどは、断面台形で高さが高い2aにあたるが、4－5と6－14は断面M字形で高さが高い3aに相当する。

円筒または朝顔形埴輪の体部の外面調整は、摩滅のために観察し難いものが多いうえに、小片であるために例えばヨコハケの分類に当てはめることができないものがほとんどであった。第2次調整の内容が比較的判るものは3－1・2、5－12、6－13・14・15である。

3－1・2は、静止痕が認められる連続的なヨコハケで、タガ間に2回以上工具をあてて施すというBb種ヨコハケが行われている。ヨコハケの上下間の切り合いが観察できた訳ではないが、底部の上半に施されたヨコハケ1単位の幅が狭いことから、これと判断した。また、6－14はヨコハケの静止痕が残るので、B種に分類できるが、細分はできない。

5－12、6－13・15は、長いストロークでヨコハケを施すCa種である。ただし、6－13・15は破片が小さいので確定的ではない。観察表の該当個所には疑問符を付した。

円筒埴輪の口縁部の形態は、かろうじて4－3・4を示すことができた。いずれも外反して端部に面を持つⅢa類である。

3－1・2、8－24～27は底部の形状が判るものである。上田睦氏は、主にⅢ期の円筒埴輪の底部端内外面に、底部の自重による歪みをハケ・ナデ・ケズリによって訂正する技法が認められるとされ、これを「底部の調整」と呼ばれた（上田1997）。

このような底部の調整は、3－1では認められず行っていないものと思われるが、3－2、8－24～27では、ナデによるア類が観察できた。

なお、底部端から第1段タガ上辺までの高さ（底部高）が判る、3－1・2は、それぞれ、15.5cm・15.3cmと、ほぼ同じ数値を測る。

8－28は壺形埴輪の底部とみられる。小片であるが、復元底部径19.0cmを測る。内外面はタテ方向のハケによって調整し、端部は強いヨコナデを施している。

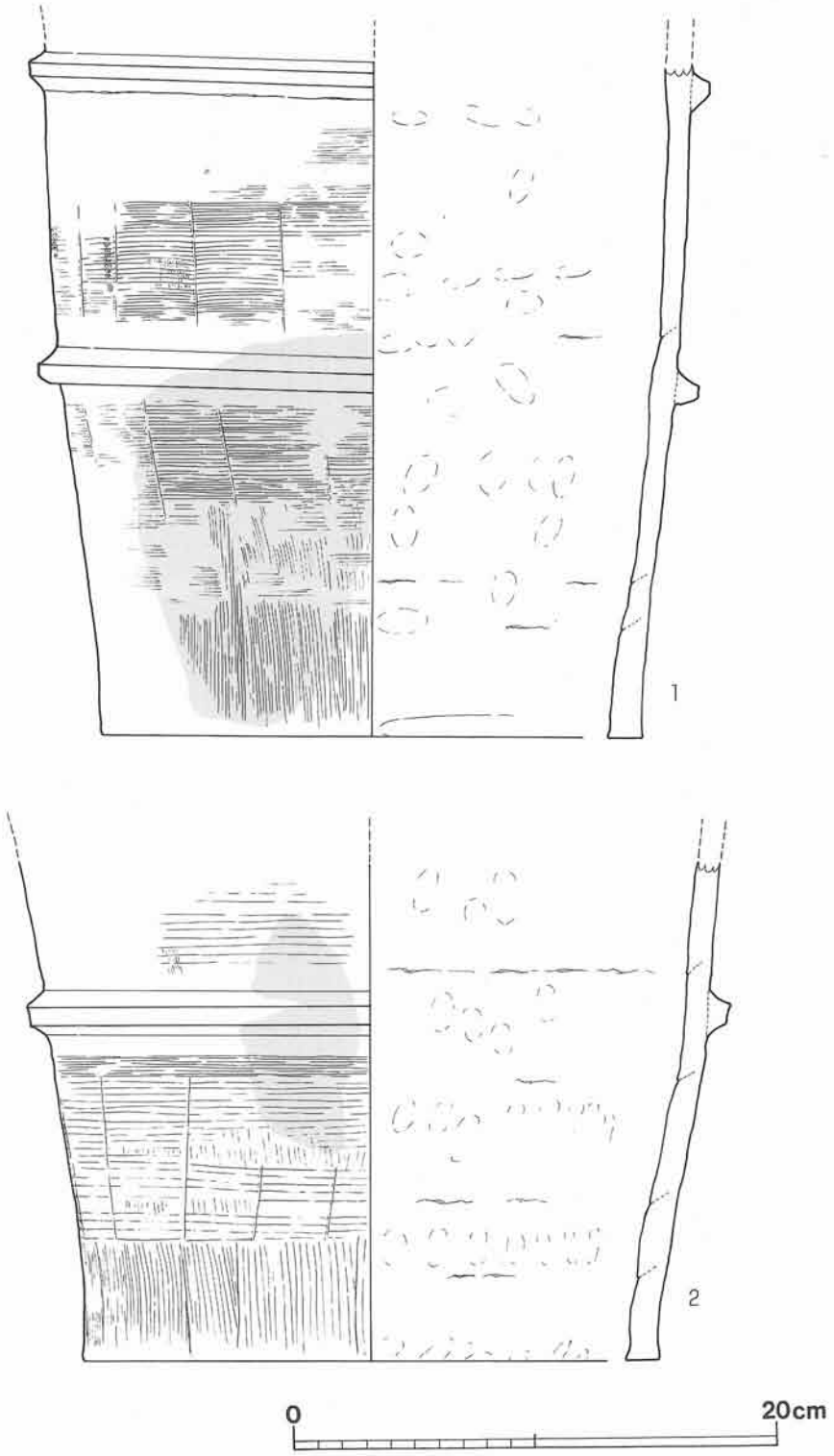


図３　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土円筒埴輪（その１）　（Ｓ.＝１／３）
アミは黒斑

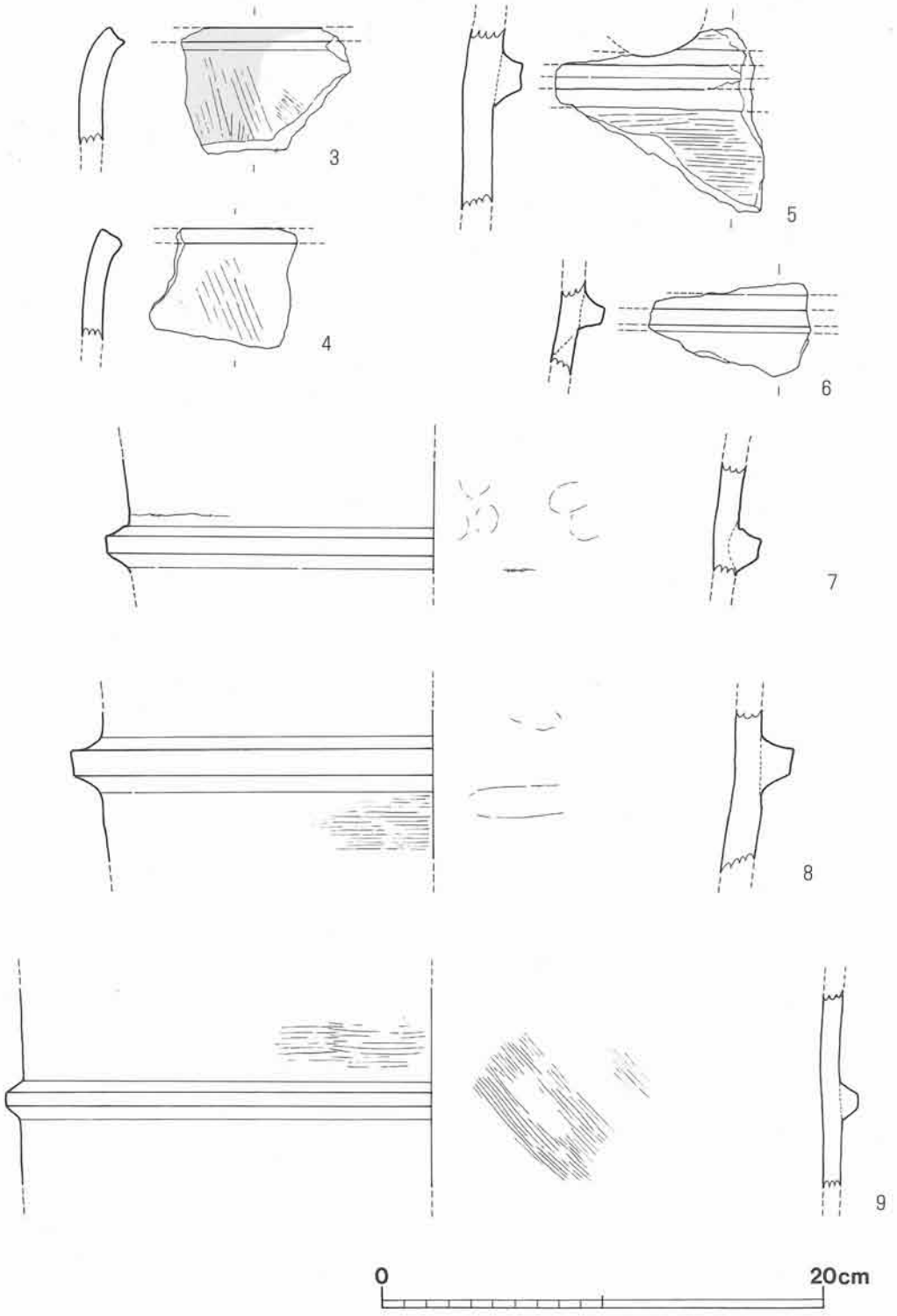


図4　A地点（後円部丘壇東端）出土円筒埴輪（その2）　（S.＝1／3）
アミは黒斑

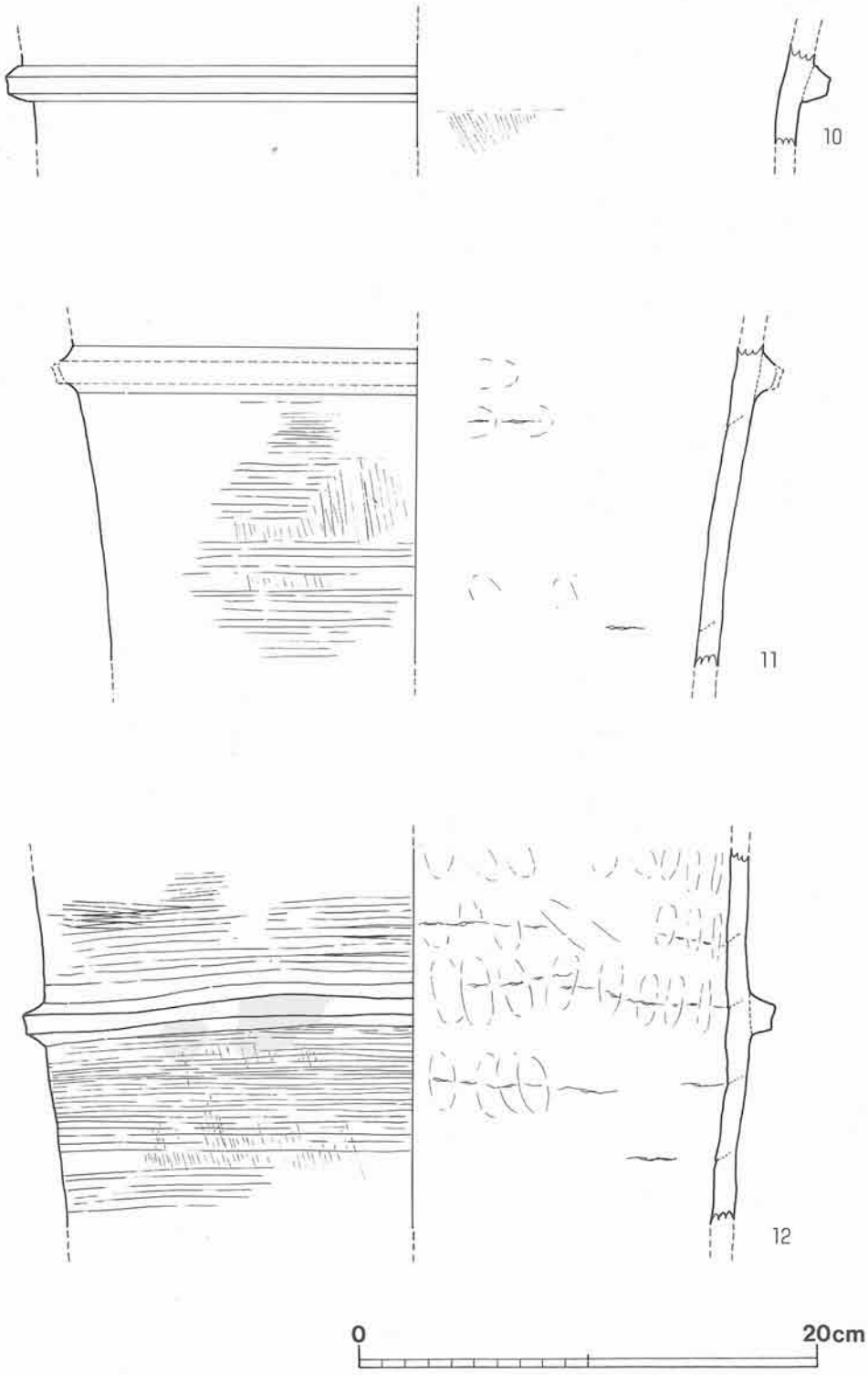


図５　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土円筒埴輪（その３）　（Ｓ.＝1／3）
アミは黒斑

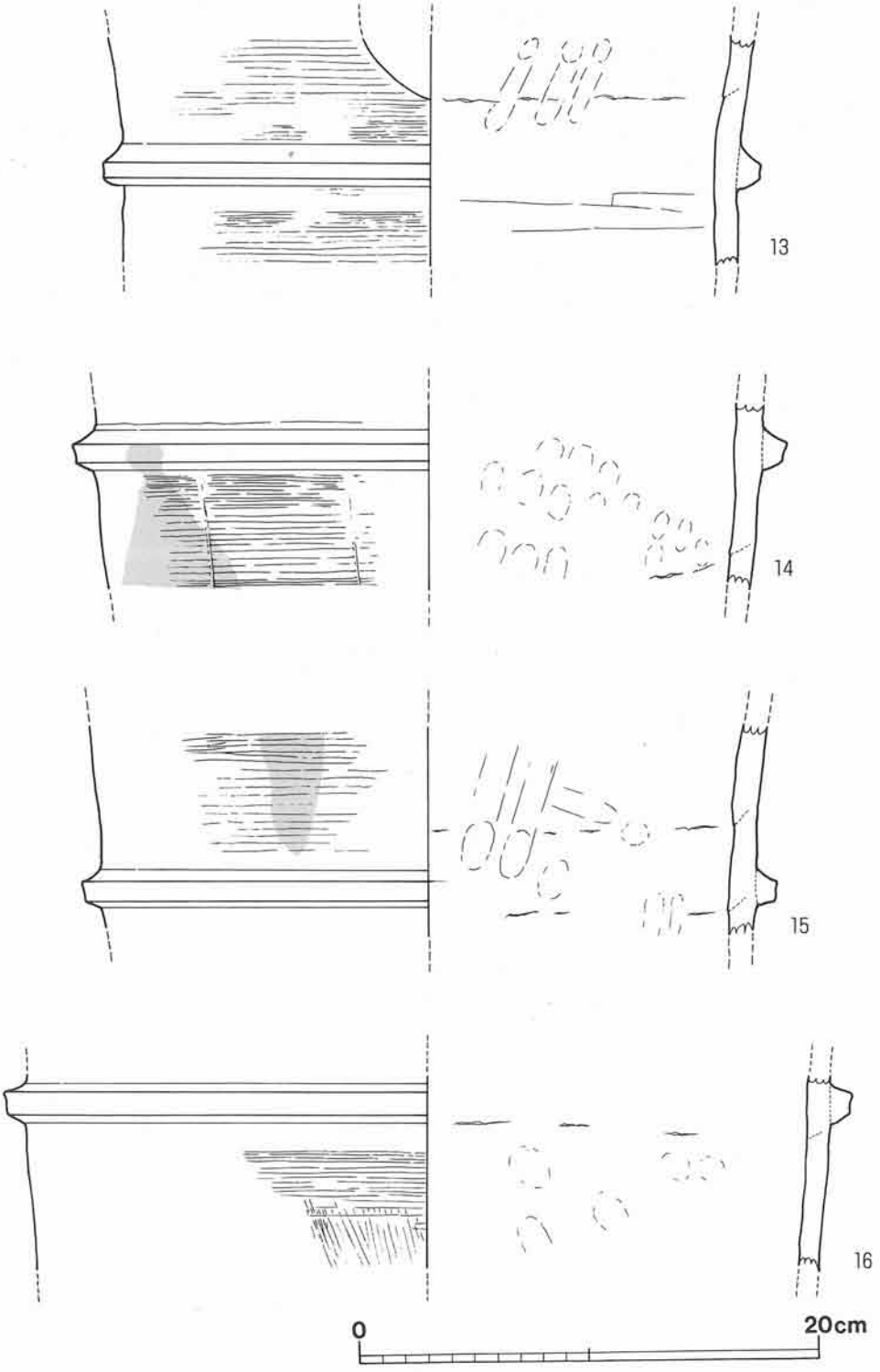


図6　A地点（後円部円丘壇東端）出土円筒埴輪（その4）　（S.＝1／3）
アミは黒斑

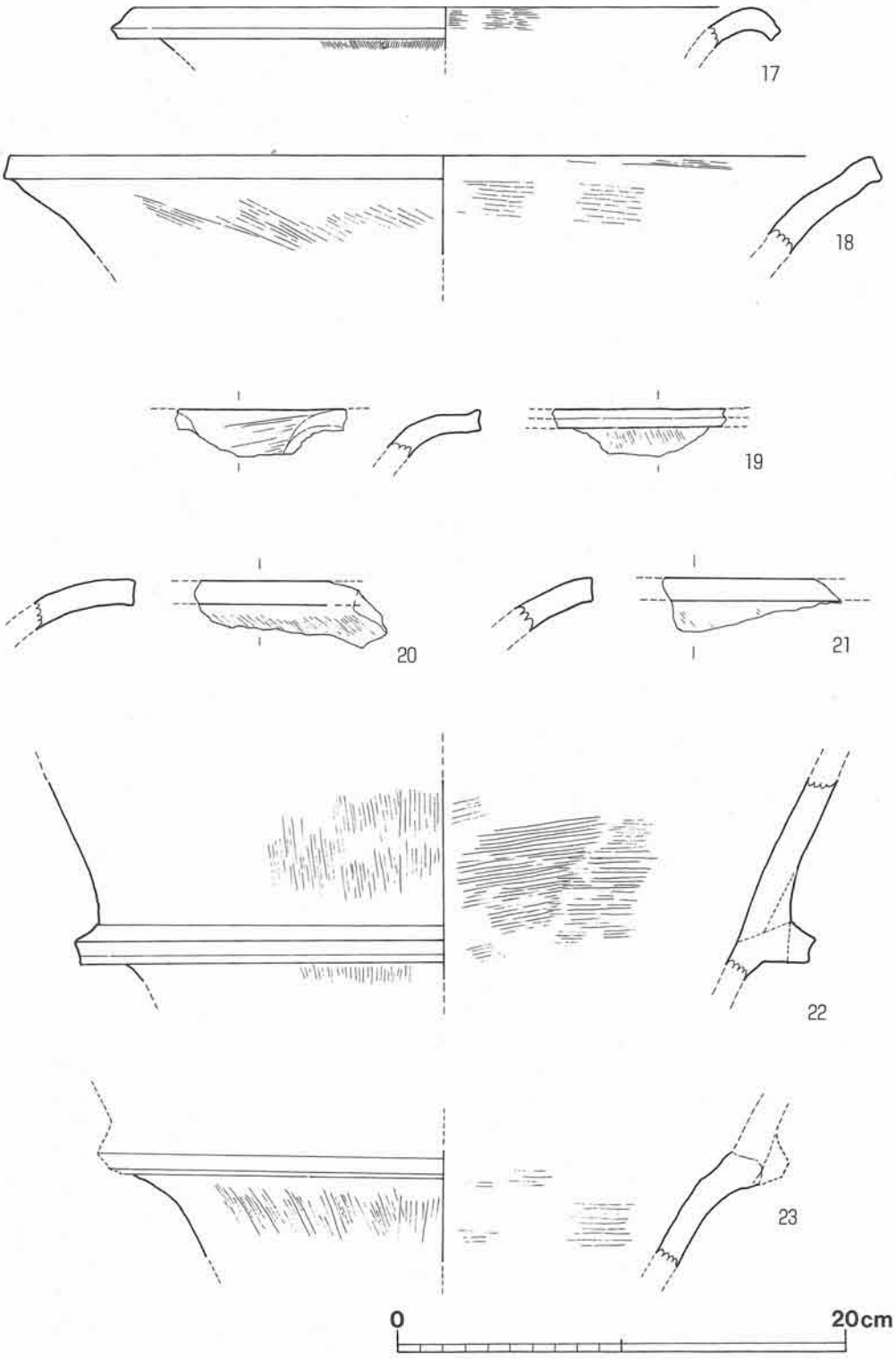


図７　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土円筒埴輪（その５）　（Ｓ.＝1／3）

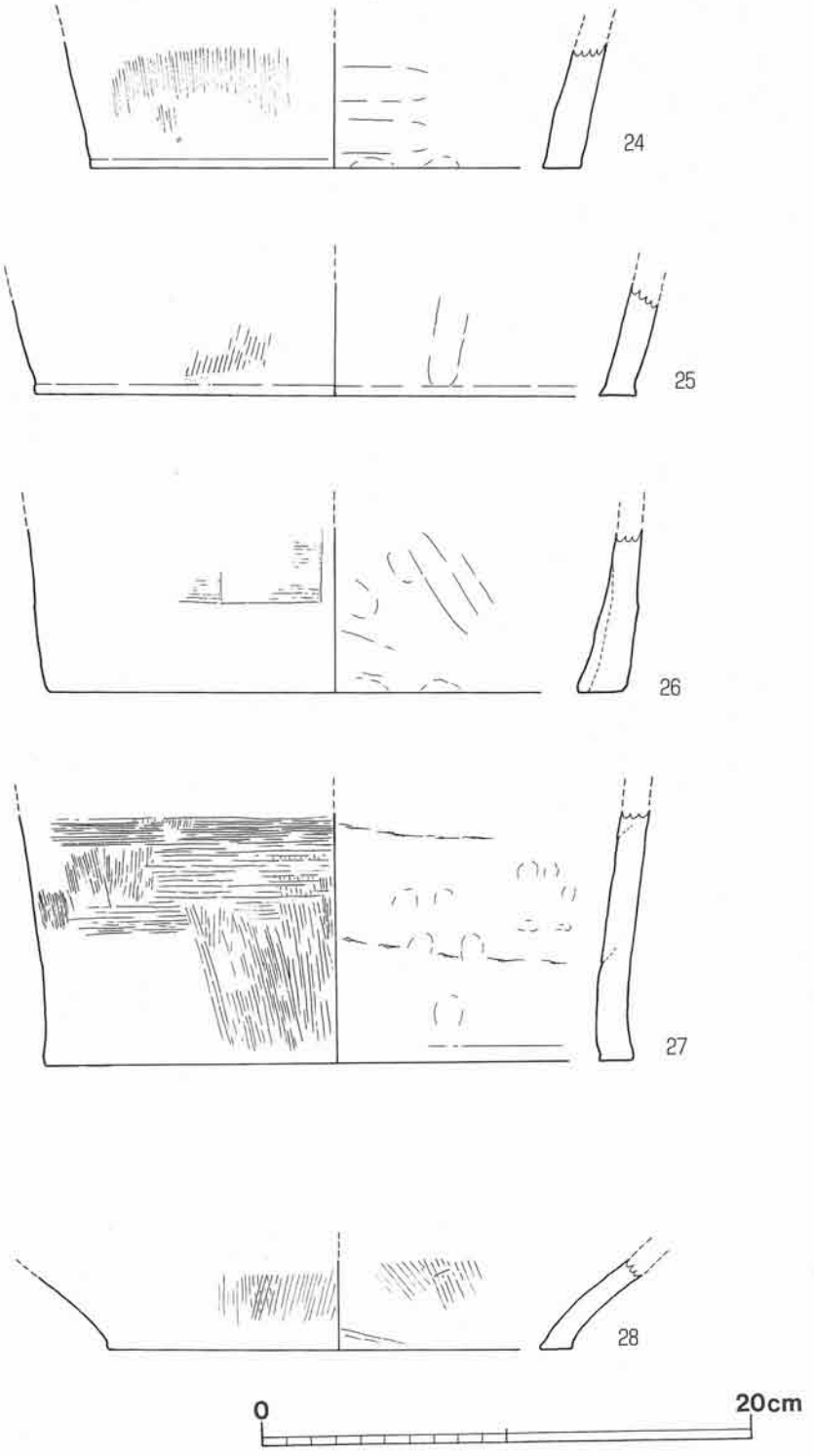


図8　A地点（後円部円丘壇東端）出土円筒埴輪（その6）　（S.=1/3）
アミは黒斑

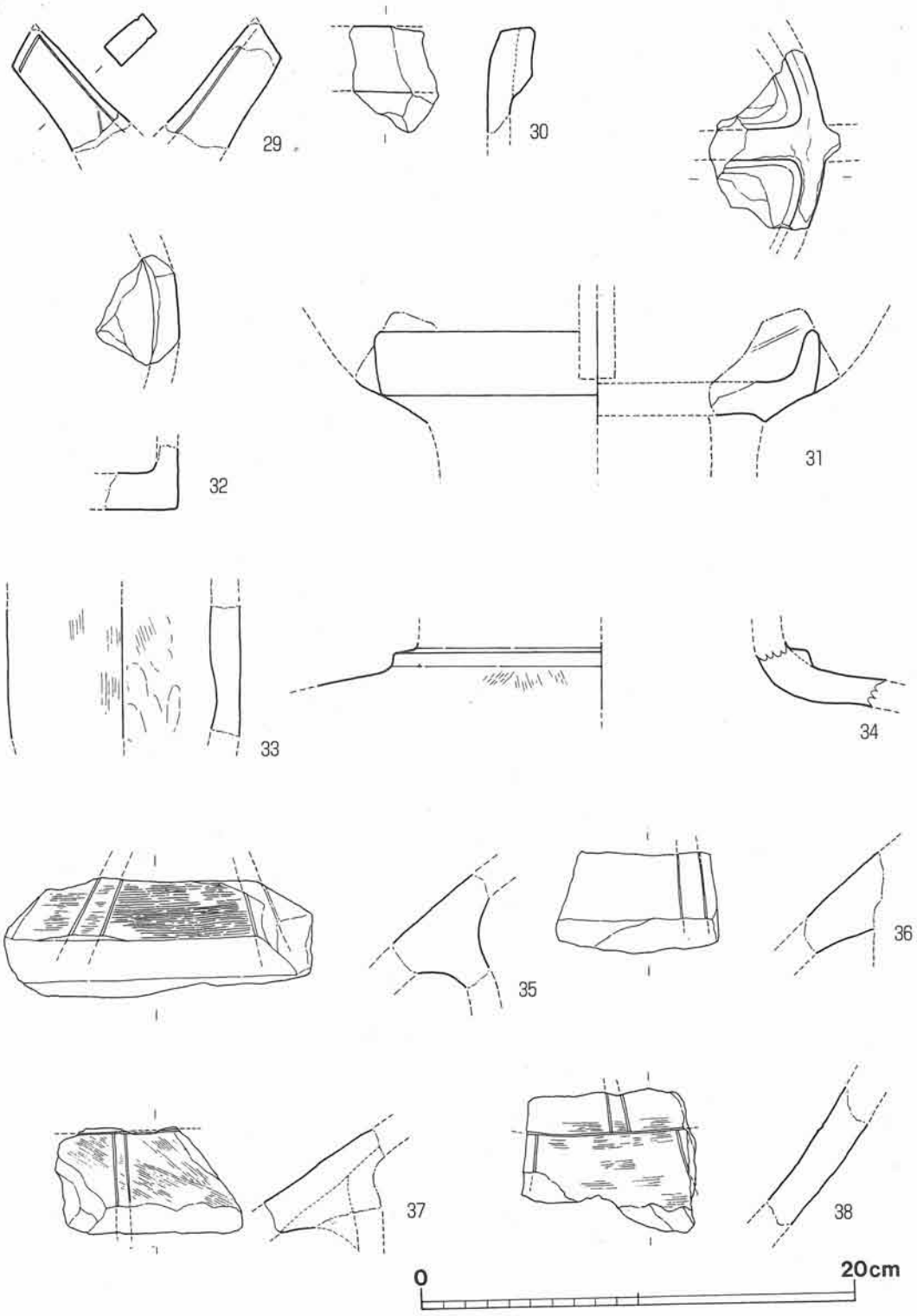


図９　Ａ地点（後円部円丘壇東端）出土形象埴輪（その１）　（Ｓ.＝1／3）
アミは黒斑

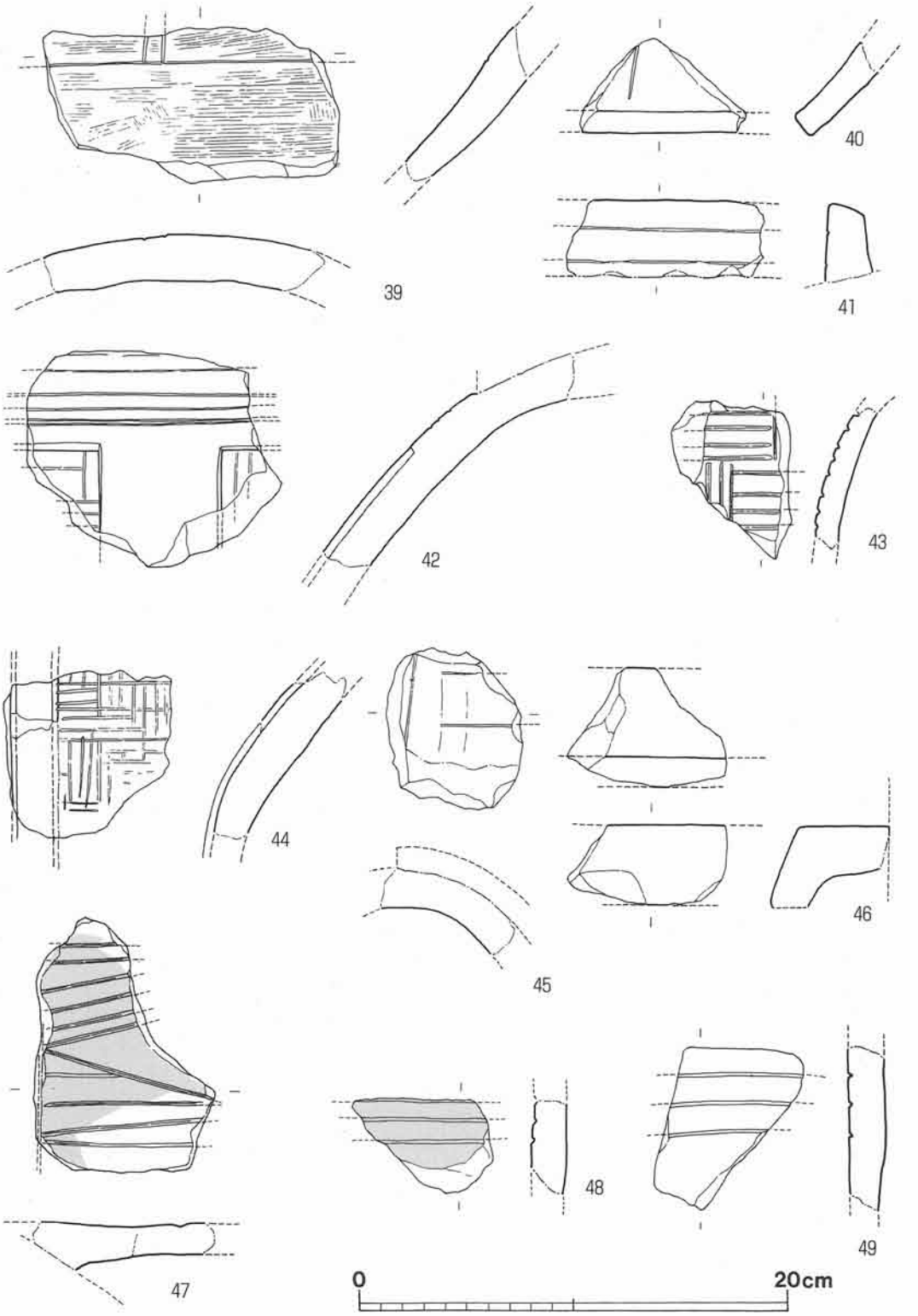


図10　A地点（後円部円丘壇東端）出土形象埴輪（その２）　（S.＝1／3）
アミは黒斑

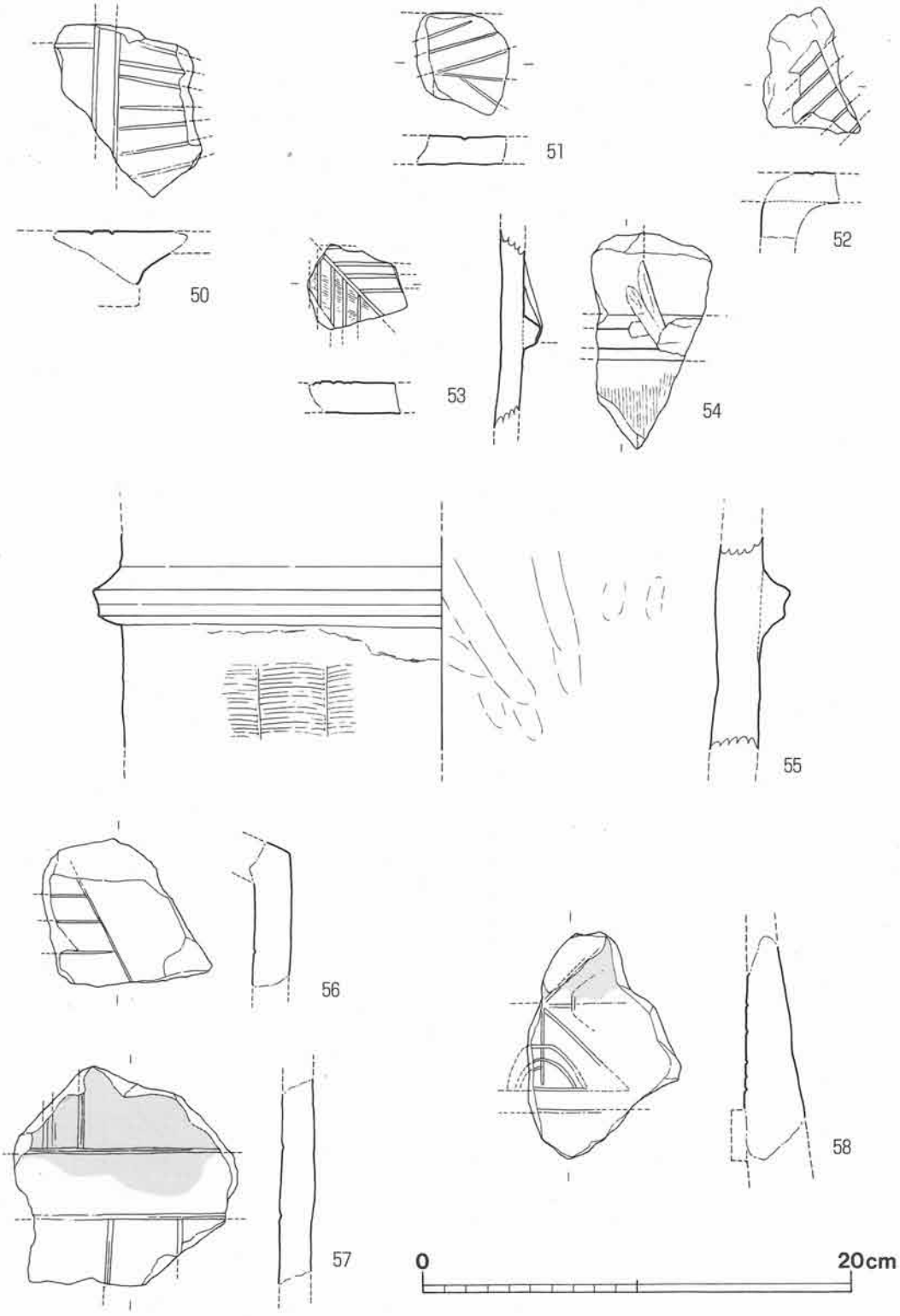


図11　A地点（後円部円丘壇東端）出土形象埴輪（その3）　（S.=1/3）
アミは黒斑

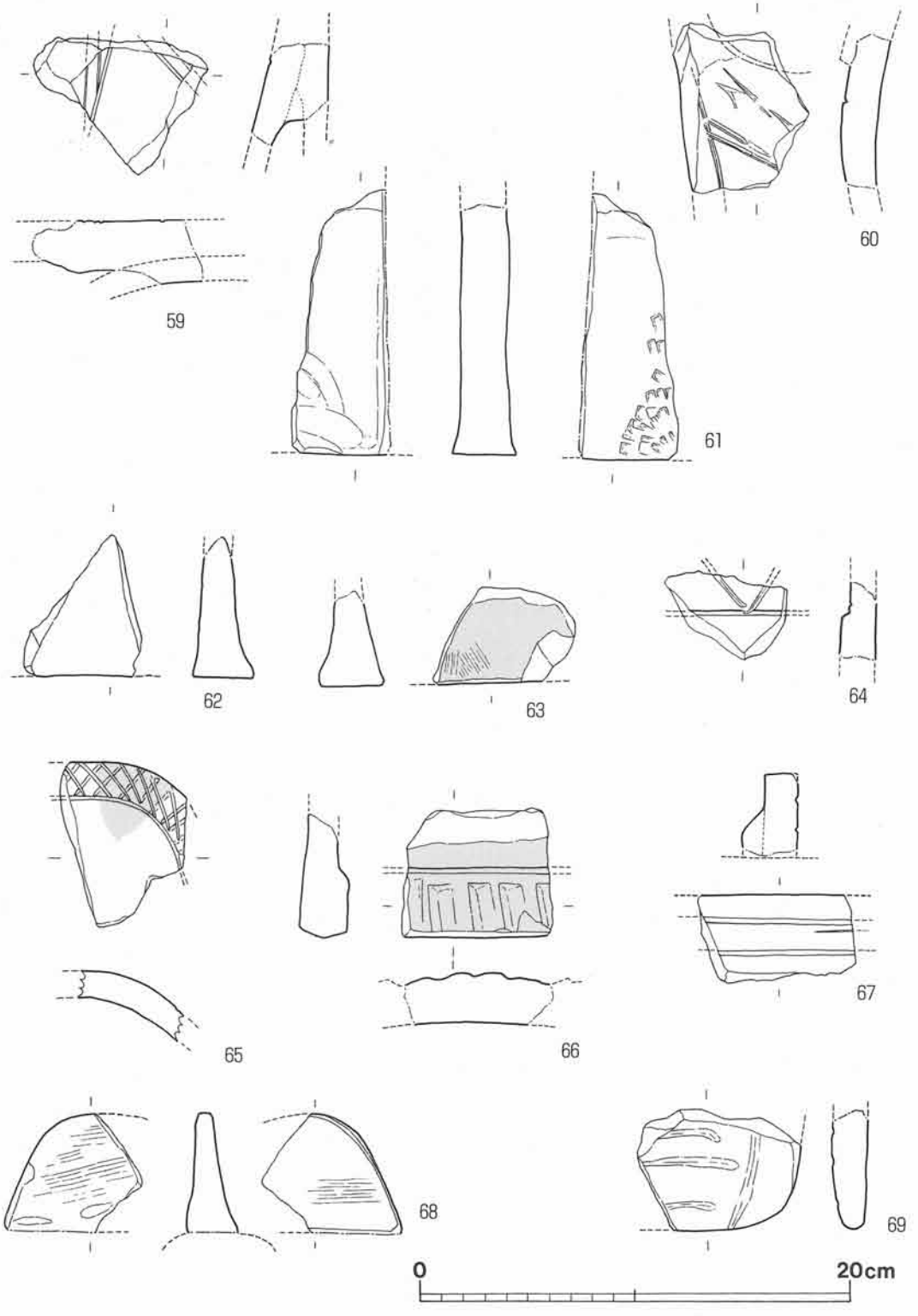


図12　A地点（後円部円丘壇東端）出土形象埴輪（その4）　（S.=1／3）
アミは黒斑

2．形象埴輪

他にコンテナ１杯分の破片があるが、別個体とみられるものを抽出した上で、特徴的な部位を図９～12 に図示する。なお、A 地点から出土した形象埴輪片は、およそ40個体分あると推測され、いずれも有黒斑またはそれと推定できるものである。

９－29～10－40 は衣蓋形埴輪で、室宮山古墳では衣蓋形埴輪の出土は初例である。立飾部のうち、飾り板の鰭（９－29）、飾り板受部（９－31・32）、軸（９－33）の破片がある。本体部は、軸受け部（９－30）、軸受け部下縁突帯を含むもの（９－34）、衣蓋部（９－35～10－40）がある。衣蓋部には中央突帯を巡らせずに線刻で表現するらしい。

10－41～46 は家形埴輪で、10－45 のように室宮山古墳には円柱の家形埴輪も存在するらしい。10－47～11－55 は盾形埴輪で、11－54 はタガの上から盾部を貼り付けたことが判る資料である。11－56～12－63 は靫形埴輪とみられ、11－58 は直弧文を表現する。

12－64は短甲形埴輪で、帯金は突帯で表現し、三角形の地板を沈線で描く。帯金を突帯で表現するのは古市古墳群の墓山古墳で類例（梅原1934）が知られるのみで、室宮山古墳でも初例である。12－65は短甲形埴輪の押付板部分で、覆輪を斜格子文で表現する。12－66 は冑形埴輪の板錏の下端部で、切り込みのある突帯で覆輪を表現する。室宮山古墳における冑形埴輪は、盾形埴輪の上部に挿入されることが判っている（千賀ほか1995）。12－67～69 は鳥または鶏形埴輪の各部であろう。

3．陶質土器

13－70．船形

準構造船を写した象形土器の舳先の竪板（隔壁）部分とみられる。その理由は後述し、これを前提として形状等の報告をする。

本来は上部が手前に傾斜した状態で本体に取り付くが、ここでは平面として図示する。

残存高 6.2cm、残存幅5.6cm、奥行きは最大で1.7cmで、やや下膨れの箱形を呈する。箱形を構成する粘土板の厚みは3.5mmから最大で6.0mmと極めて薄い。胎土は精良で、肉眼では鉱物粒を観察できない。焼成は良好で堅緻である。色調は外・断・内面ともいずれも灰色。裏面に緑色釉、側面には黒色釉がかかる。

竪板（隔壁）頂部には牛角のような突起が左右ともに取り付くものとみられ、中央上端にも低く丸い突起がある。側面（舷側板）は上下共に欠失しているが、途中から防舷材（フェンダー）を表現した鰭状の突帯が左右に張り出し、下方に至るほど彎曲して舷側板下部に至る。防舷材と竪板との境には沈線が施されている。

防舷材裏面側には剥離痕があり、板状のものが張り付いていたらしい。ただし、緑色釉はほぼ裏面全体にかかり、図示状態での竪板の頂部のみかかっていないことからみて、板の幅は広くなく、

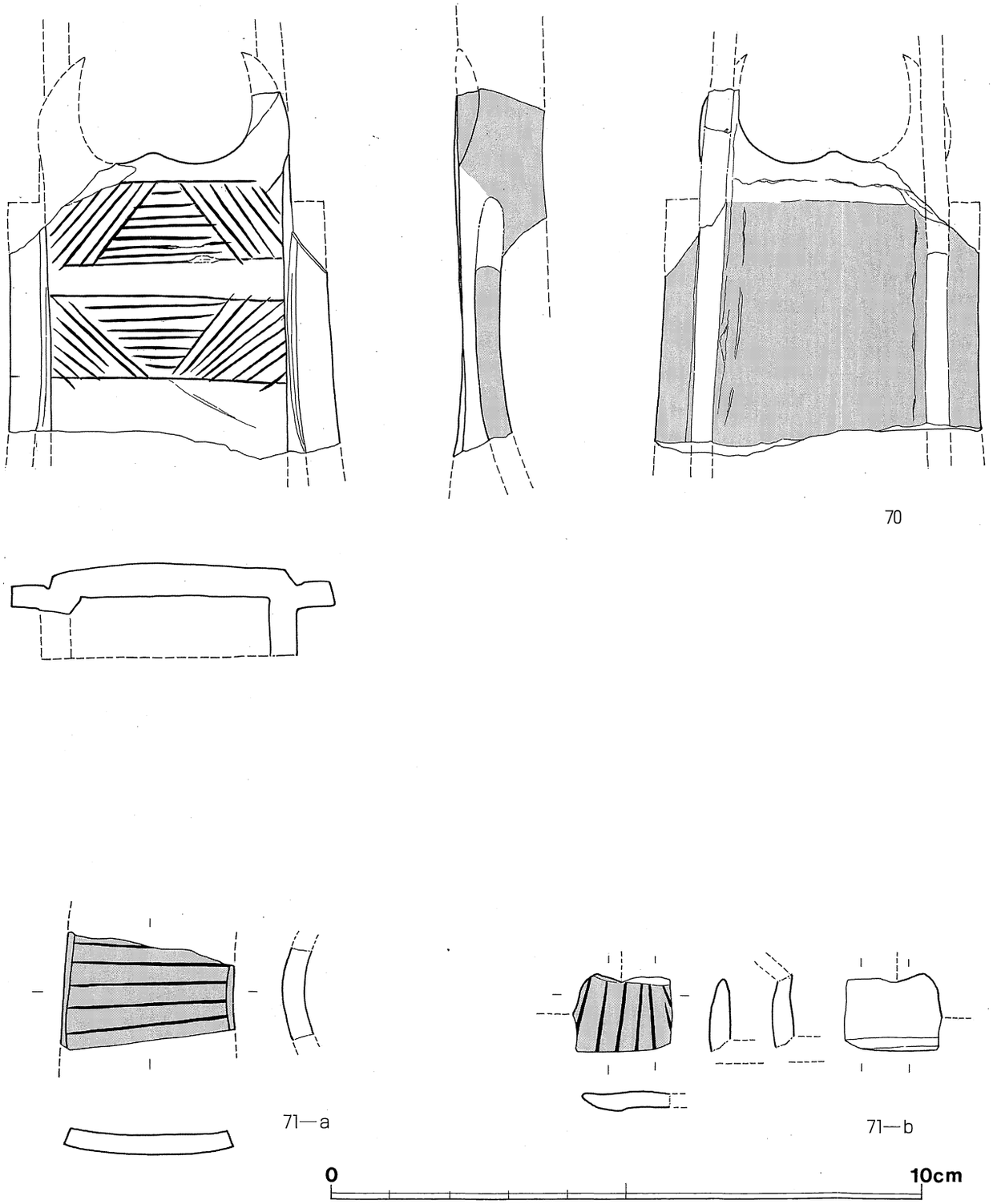


図13　A地点（後円部円丘壇東端）出土陶質土器（その１）　（S.=1／1）
アミは自然釉

舷側板が最もよく残っている部分にほぼ等しいものとみられる。

竪板正面の線刻は鋭利な原体による。上縁と下縁を画する横線の中間に帯状の2条の横線が描かれた後、中央の、辺を対向する鋸歯文、それを埋める平行線と左右の斜線の順で描かれる。竪板はこの線刻以下でやや手前に膨らむ。

これを船形土器の竪板（隔壁）部分と判断する理由は以下の通りである。まず、裏面の緑色自然釉はほぼ全面にかかるのに対して、表面には釉はかかっていない。このことは、裏面を上または斜め上にして本体に取り付いていたことを示す。また、防舷材（フェンダー）と判断した部分は下方に至るほど裏面方向に彎曲している。この2点の特徴から、本体から斜め上に向いて取り付くものと判断され、形状や法量の特徴からも、船形土器の竪板（隔壁）部分とするのが、湖厳美術館蔵品の類例（河上邦彦氏のご教示による。）からみて妥当である。

我が国では大庭寺232号窯（岡戸編1995）に船形須恵器の例があるが、船形陶質土器の出土は初例である。両者を比較すると、本例のつくりは複雑かつ精密で、胎土も非常に精良であり、また、竪板部分の粘土板の厚みも最小3.5㎜、平均的なところで4.5～5.0㎜と極めて薄いのに対し、大庭寺232号窯例の竪板部分は1枚の単なる板で表現され、6㎜前後の厚みがある。

つくりの丁寧さ、あるいは作製にかかる手慣れの度合い、という点で異なった印象を抱かざるを得ず、また、本例の色調は白っぽい灰色で、一般的な須恵器とは著しく異なるので、本例は陶質土器であると判断する。

13－71．不明象形土器

同一個体とみられる2点の破片があり、それぞれ71－a、71－bとして記述する。71－a は図示状態の左右ともに生きており、上下に続く。左右の幅は2.8～2.9㎝である。粘土板の厚みは3.5～4.0㎜と、極めて薄い。

複雑な曲面を呈し、左右方向の断面では中央が凹み、上下方向の断面では中央が膨らむ。表面の線刻は鋭利な原体により左から右に描かれ、概ね平行線だが右側に収斂する傾向も認められる。

表面と左右側面には全面に緑色釉がかかるが、裏面には釉は全く及んでいない。断面、裏面の色調は灰色で、焼成良好。胎土は精良で肉眼では鉱物粒を観察できない。鰭やリボン状の部位を表現したものかとも思われる。

71－bは図示状態での左上の隅の、小さな突起を表現する部分のみが生きており、他は破面である。粘土板の厚みは中央の最も厚いところでも4.0㎜と、極めて薄い。

下縁には向こう側にほぼ垂直に折れ曲がる部分から剥れた痕跡が認められる。複雑な曲面を呈し、左上の小さな突起部分から右下方向にやや凹み、中央附近で膨らむ。

表面の線刻は鋭利な原体による。右から2本目の線刻で左右からのものが収斂するようなデザインになるらしい。表面には緑色釉が全面にかかるが裏面には及んでいない。断面、裏面の色調は灰色で、焼成良好。胎土は精良で肉眼では鉱物粒を観察できない。

71－a・bの粘土板の厚みは最大で4.0㎜と極めて薄く、胎土も非常に精良であり、つくりの複雑さや線刻に70に通じる精密さがあり、また、本例の色調も70と同様、白っぽい灰色で、一般的な須恵器とは著しく異なるので、陶質土器と判断する。不明な点も多いが、おそらく人物を含む象形土器、例えば騎馬人物像などの一部ではないかと推測する。

14－72. 脚部

高杯等または13－70・71とは別個体の象形土器の脚部とみられる。脚部径10.8㎝（残存1／3からの回転復元）、残存高6.8㎝。

本体との接合部からほぼ垂直に下ったのち、やや外彎しつつ下外方に延び、さらにわずかに開く端部に至る。端部はやや丸い。3条の突線が巡り、その端部はやや丸い。三角形３方スカシを２段に配する。その下段の突線間はスカシの有無は不明だが、おそらくないであろう。

調整はヨコナデ（ロクロ回転方向左廻り）。胎土は精良で、直径0.5㎜の長石をわずかに含む。焼成は良好で堅緻。色調は外面灰青色、断面紫灰色、内面灰青色で、スカシ孔壁面と内外面上位ならびに突線の下縁に黒色の自然釉がかかる。内面とスカシ孔壁面の釉が濃く、突帯下縁にもかかるので、逆さにして焼成された可能性が高い。

三角形スカシを３方に配し、突線を３条有する点、脚端部に面を有さず、やや丸く収める点など

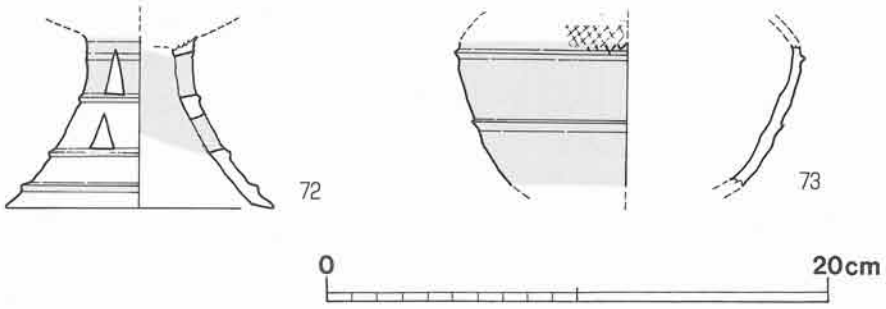


図14　A地点（後円部円丘壇東端）出土陶質土器（その２）　（S.＝1／3）
アミは自然釉

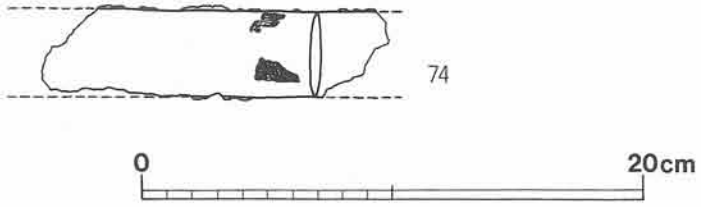


図15　A地点（後円部円丘壇東端）出土鉄剣　（S.＝1／3）

で、大庭寺遺跡や陶邑古窯址群とは著しく異なった特徴を有しており、やはり陶質土器と見られる。

定森秀夫氏のご教示によると、高杯脚部とすれば、咸安付近のものとみられ、4世紀末葉から5世紀初頭に位置づけることが可能という。

14－73. 脚付把手付壺

体部の一部しか残存しないが、脚付把手付壺とみて大過ないだろう。やはり14－72とも別個体とみられ、口縁直下と推定される位置には3㎜幅で鋭利な原体により斜格子文が施され、上位の突線を経てやや内彎しつつ下内方に下り、中位にももう1条突線がある。

突線は鋭いが、上位の突線はまだしも、中位の突線は人差し指と親指で摘まむことができないほど低い。中位の突線の位置での直径は12.5cm（残存1／6からの回転復元）である。

調整はヨコナデ。胎土は精良で、直径0.5㎜の長石をわずかに含む。焼成は良好で堅緻。色調は、外面は全面に黒色釉がかかり青灰色を呈し、断面紫灰色、内面灰色である。

大庭寺遺跡や陶邑古窯址群でもこの器種の焼成は稀少なようであり、また、13－70～14－72を陶質土器と認めることができるならば、室宮山古墳の築造時期からしても、本例も陶質土器とみるのが妥当であろう。

4. 鉄剣

15－74は断面レンズ形の剣身部で、鎬は認められない。刃部の幅3.4cm、厚みは0.5cmである。

B地点（後円部北石室直上）

埴輪には、円筒または朝顔形埴輪（16－1）、家形埴輪（16－2～6）、盾形埴輪（16－7）などがある。家形埴輪には16－5の押縁突帯の幅からみて、大形のものがある。埴輪はこのほか9片あり、その内には衣蓋形の体部とみられる器壁の厚いものがある。

竜山石約2kgのうちには辺を一部残す破片（17－9・10）がある。

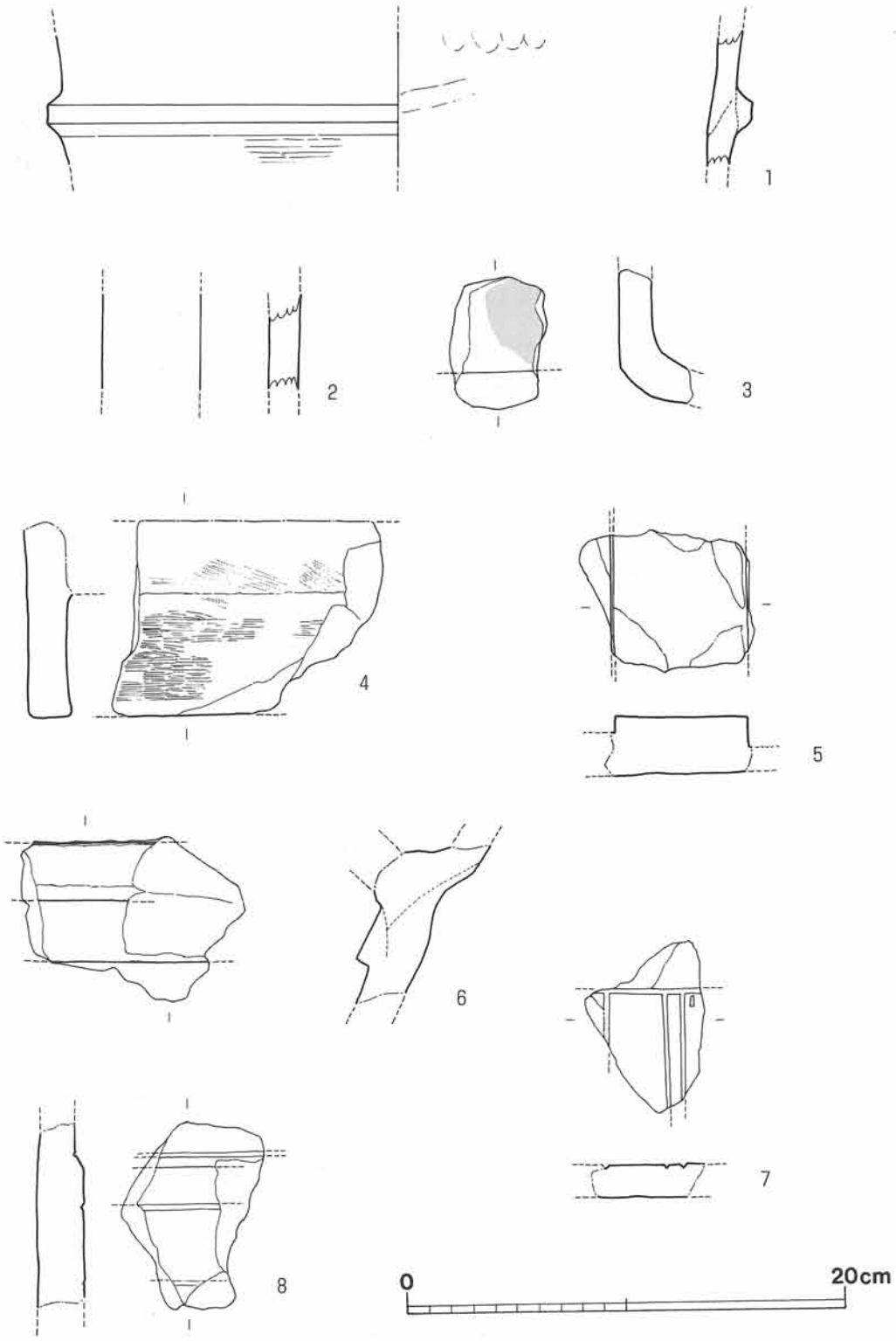


図16　B地点（後円部北石室直上）出土埴輪　（S.=1/3）

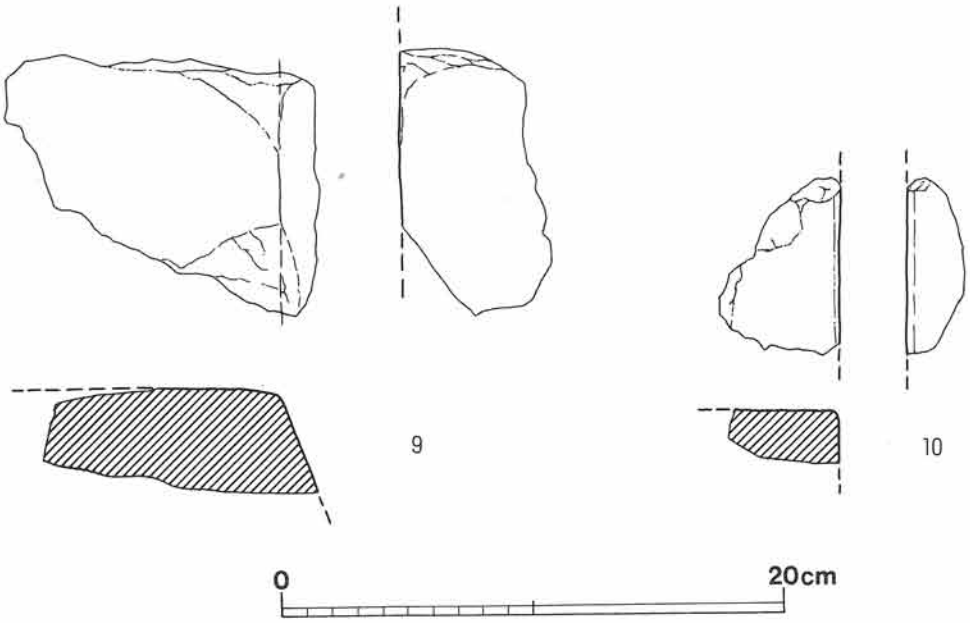


図17　B地点（後円部北石室直上）出土竜山石　（S.=1/3）

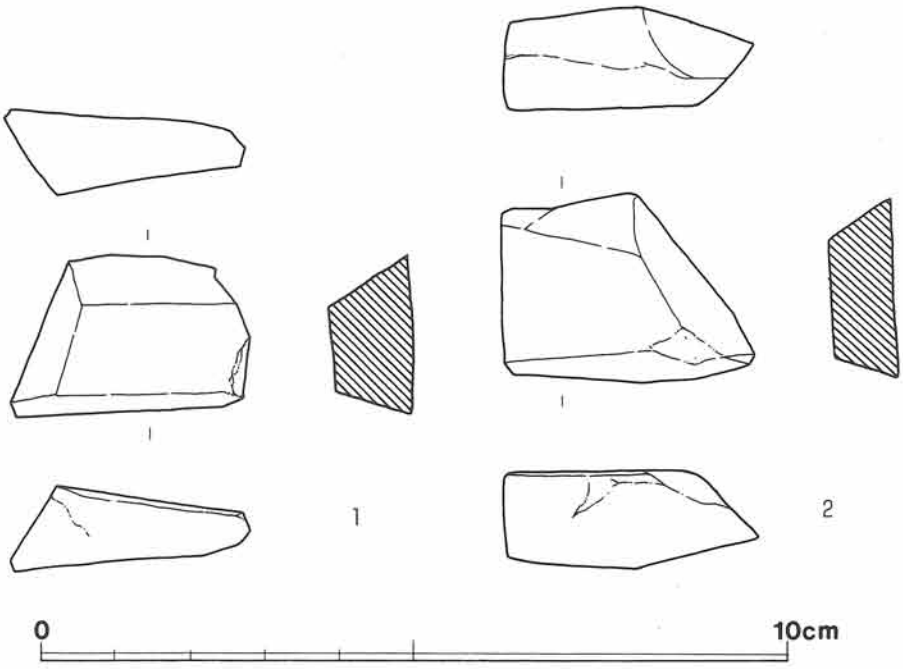


図18　C地点（後円部石室西）出土緑色凝灰岩（グリーンタフ）
（S.=1/1）

C地点(後円部石室西)

C地点からは埴輪片も数点ばかり出土したが、いずれも図化不可能な細片であった。図18・19には、緑色凝灰岩（グリーンタフ）原石を掲げた。いずれの石質も良質とはいえない。出土したすべての破片の写真(図19)のうち、割面を残す特徴的な1・2は実測図として図18に示した。

18−1は、図上で右側面が欠落しているが、他の5面に割面を残しており、18−2は一部を欠くが、すべての面に割面が見える。原石面を比較的明確に残すものは、19−6・7・9・10である。

番　号	長径(cm)	短径(cm)	厚み(cm)	重さ(g)	番　号	長径(cm)	短径(cm)	厚み(cm)	重さ(g)
19−1	3.3	2.1	1.2	7.5	19−8	5.6	2.1	1.5	17.3
19−2	3.3	2.5	1.3	8.7	19−9	3.1	2.4	1.4	6.7
19−3	3.4	2.5	2.2	13.9	19−10	2.9	2.4	1.1	5.6
19−4	2.9	2.2	0.9	5.8	19−11	1.4	0.9	0.6	0.5
19−5	2.5	1.5	1.0	4.2	19−12	2.4	0.9	0.9	1.7
19−6	5.6	4.0	3.1	54.6	19−13	2.5	2.1	0.9	2.7
19−7	6.4	3.4	2.4	45.6					

表1　C地点出土　緑色凝灰色(グリーンタフ)計測表

E地点(後円部北東斜面)

20−1〜3は、朝顔形埴輪で、いずれも後円部から肩部にかけての各部位である。20−4も朝顔形と思われるが、肩部突帯の内面にあたる箇所に、断面が三角形を呈する突帯がめぐる。残念ながら、残存部分が少なく全体の正確な形状を知ることができない。

20−5は、円筒または朝顔形の体部である。タガの断面は、他の資料に比して低いかに見える。ただ、タガ上辺は他資料と同様なので、部分的な特徴であることも考慮して、観察表には2a類と記した。

形象埴輪は、1個体を図化できた。20−6は、家形埴輪屋根部で、障泥板が剥離した状態である。

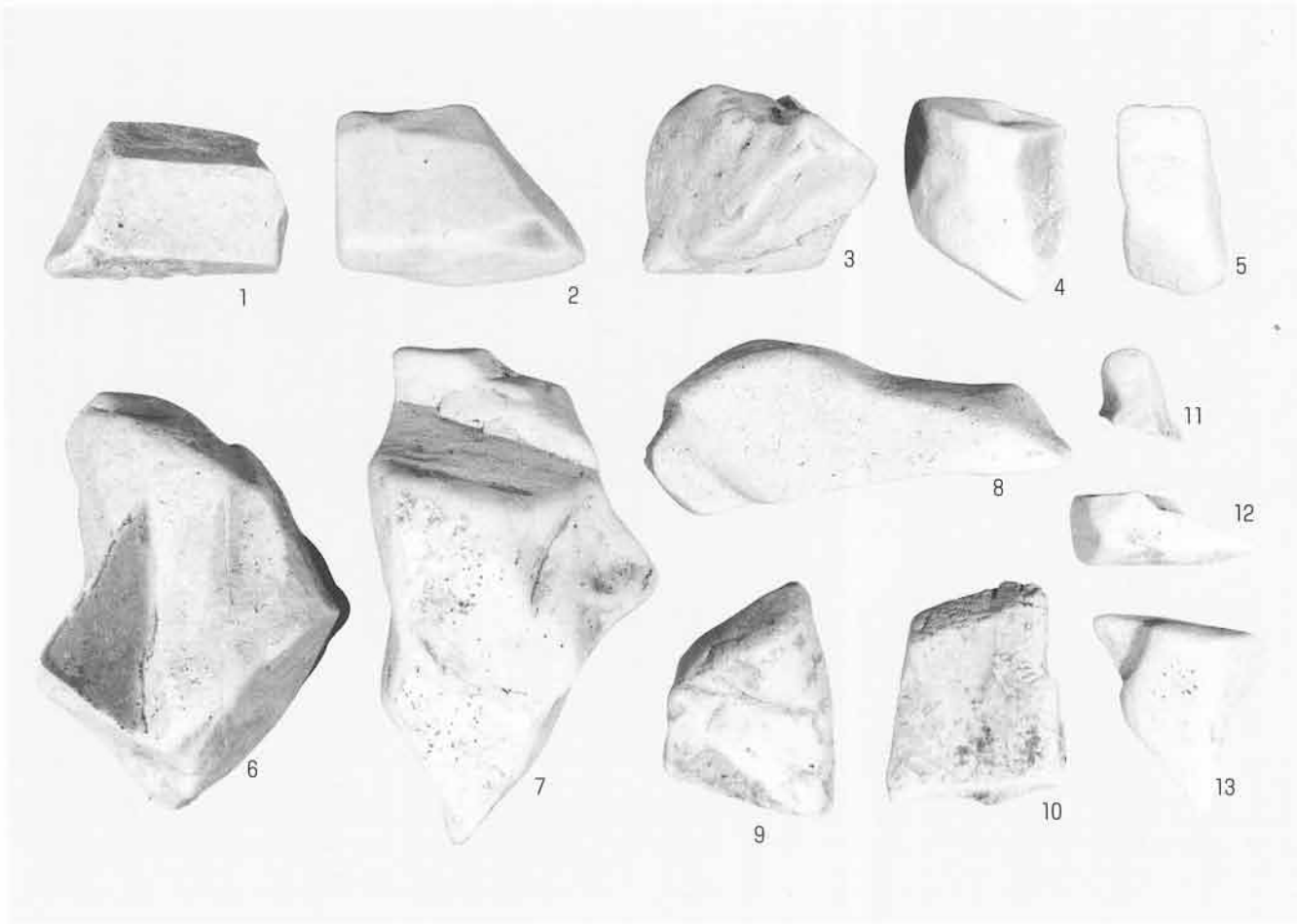


図 19　C地点（後円部石室西）出土緑色凝灰岩（グリーンタフ）
（S.≒1/1）

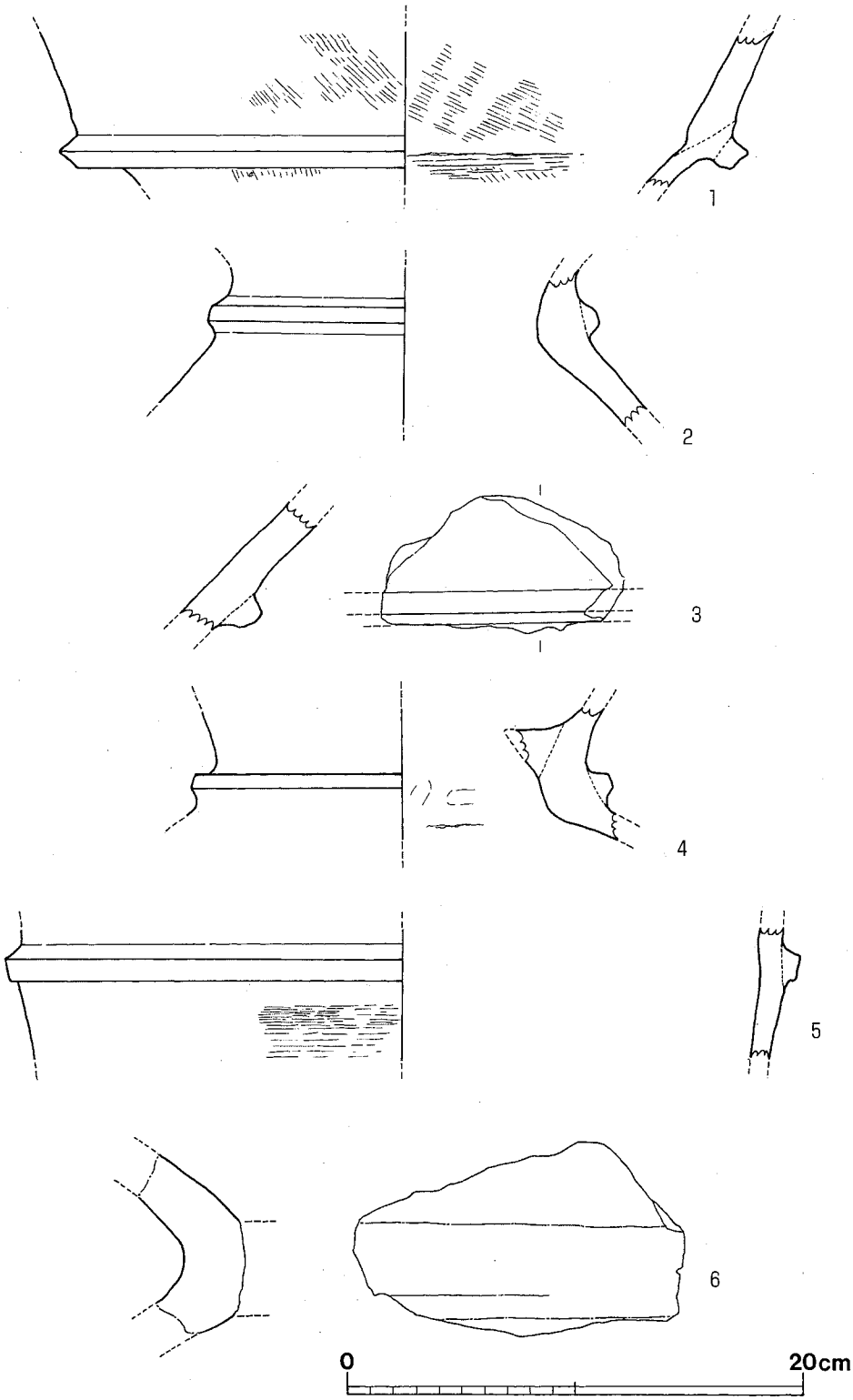


図 20　E 地点（後円部北東斜面）出土埴輪　（S.＝1／3）

F地点(鞍部前方部寄り南端)

21－1は、朝顔形埴輪の口縁部である。小破片であるため、円弧の復元などもできなかった。外面に赤色顔料が塗布されている。以下の21－2～22－5のいずれかと同一個体である可能性があるが、胎土の観察からも認定は困難である。ただ、少なくともこの地点においても円筒埴輪に朝顔形を取り混ぜて樹立していたことを示す資料といえよう。

21－2～22－5は、本来隣接して樹立されていたものであるが、細部の調整などは異なる場合が多い。

タガの断面形状に関しては、21－2は不明であるが、21－3・22－4は断面が台形を呈し高さが高い2a類、22－5は突出して上辺をつまむ1a類にあたるものだろう。特に21－3・22－4では、端部の外面(台形の上辺)を強くナデて、面を平らに仕上げている。その際、特に22－4ではハケ原体か板状の工具を使用している可能性がある。

外面の第2次調整は、21－2・3・22－4で認められる。今回出土した円筒または朝顔形埴輪では、底部においても外面第2次調整が行われている例が多いが、22－5はそれが省かれているものである。22－5では、2段目でも明確なヨコハケが観察できないので、図にも示していないが、実際に残存している部分自体が少なく、しかも下端に近い位置であるためであろう。本来2段目より上位にはヨコハケが行われているものと思われる。

21－2は、ストロークが比較的長く水平方向にハケ調整を継続させるCa種ヨコハケが行われる。

21－3は、タガ間を1つの工具でヨコハケを施し静止痕が垂直になるBc種が行われる。必ずしも2段目のタガ間距離が明確ではないが、スカシの位置からみると、図の上端から極端にその幅が広がるとは思われず、また、底部に施されたヨコハケの原体幅から、このBc種と判断した。なお、21－3の外面には、粘土接合痕がよく残っている。ほかの個体が外面調整によって、少なくとも外面の接合痕を消し去っていることからみると、粗雑な感を受ける。

22－4の外面調整は、静止痕があって、タガ間に2回以上工具を当ててヨコハケを施すBb種ヨコハケが行われている。

底部の調整については、21－2・22－4・5に認められる。22－4・5は、ナデで仕上げるア類であるが、21－2の外面にはケズリを施すウ類が認められた。

それぞれの法量は実測図および観察表に示したとおりである。底部径について見ると、21－2・22－4・5は22～24cm程であるが、21－3は28.3cmとなって、やや大きい。底部高についても21－2・22－4・5は14cm程度になる(21－2は推定)のに対して、21－3は16cmであってやや大きい傾向があるといえるかもしれない。

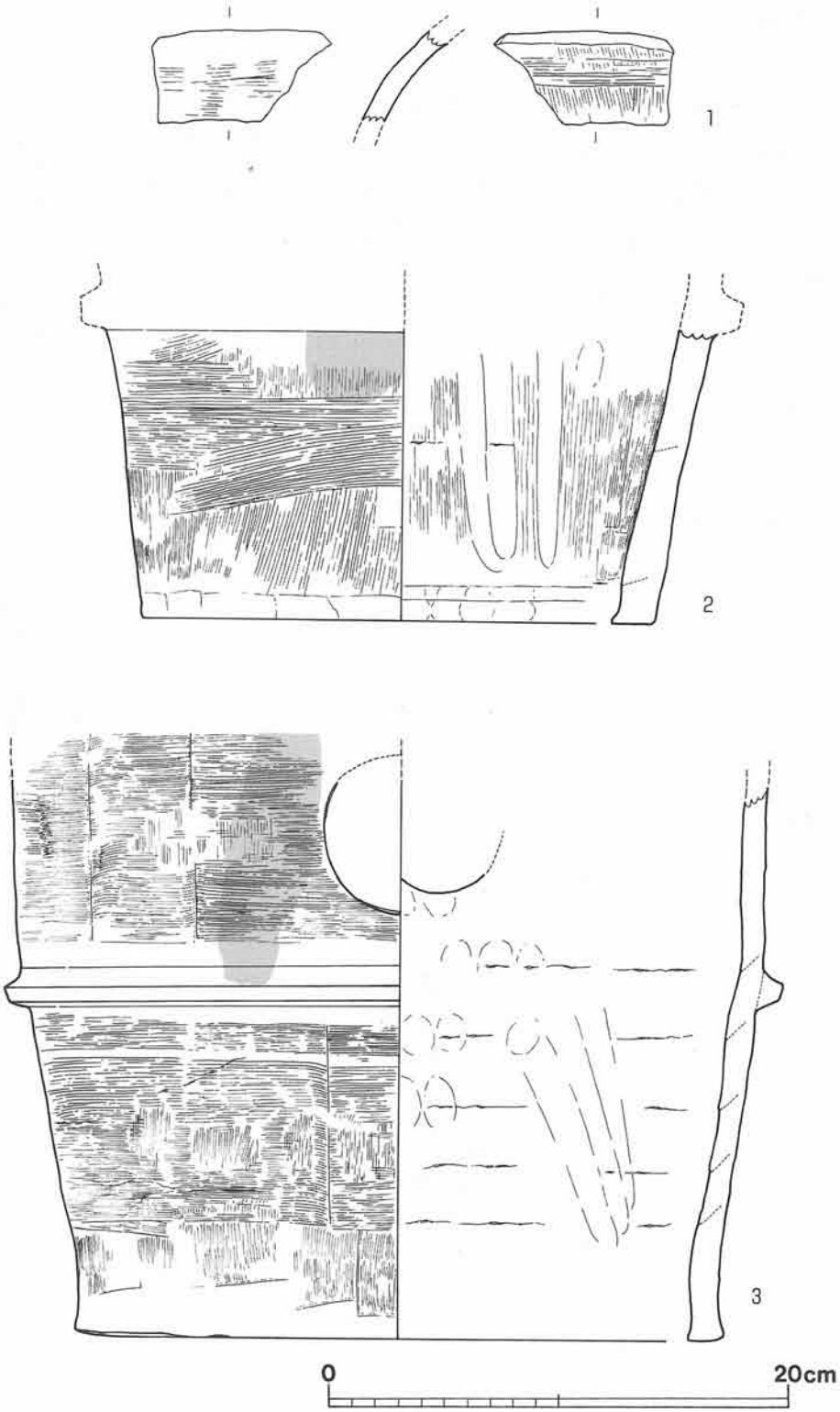
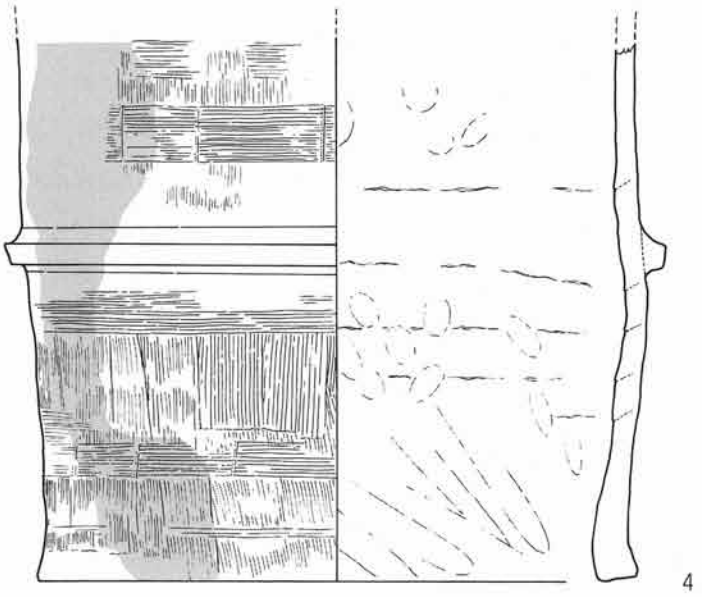


図21　F地点（鞍部前方部寄り南端）出土円筒埴輪（その1）　（S.=1/3）
アミは黒斑



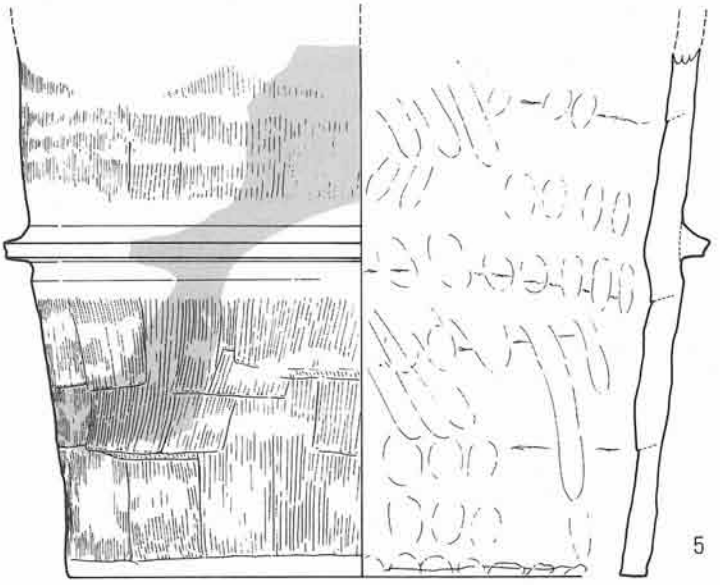


図22　F地点（鞍部前方部寄り南端）出土円筒埴輪（その2）　（S.=1/3）
アミは黒斑

第5章　遺物帰属位置の推定

以上報告してきたように、A地点（後円部円丘壇東端）の遺物は量が最も多く、内容にも注目されるものがあるのだが、その帰属位置を推定するための前提として、室宮山古墳の墳頂部における白色円礫、緑色片岩、閃緑岩などの石材の用いられ方を確認しておく。

A～D地点で出土した白色円礫については、『室大墓』（秋山・網干1959）に同種のものと思われる石材に関する報告がある。すなわち、南主体部そのものに伴うものとして、側壁と石棺との間に朱彩した白礫を全体に散布していたとされている。また、それとは別に、石室の外部施設として、内側の円筒埴輪列と外側の形象埴輪列との間で、「若干の部分であったが、白礫を敷いたと思われる状態」を検出したとも述べられている。

今回採集した白色円礫を見ると、朱の付着したものは極わずかで、特にA地点（円丘壇東端部）での採集地点では、土砂全体の割に極めて多量であったので、石室内に散布されたものだけとは考えがたい。南主体部の発掘調査では、形象埴輪による区画内の白礫は全体にわたって検出されたわけではないようだが、今回出土した白色円礫の多くは、これらと同様の性格のもので、元はそのような場所に厚く散布されたものである可能性が高いと考える。

また、報告書には、南主体部の形象埴輪北側列外側で、竪穴式石室に使用した石材と同様の「水成岩の割石を敷いたと考えられる痕跡を検出した」と述べられている。今回、A～D地点で白色円礫に共伴して出土した緑色片岩は石室材の一部と考えるが、報告されるような敷石が比較的広い範囲にも行われていたのであれば、これらについても、こうした敷石の一部である可能性もある。

さて、今回採集した石材には、これらのほか竜山石と閃緑岩があった。

竜山石は、北主体部上にあたるB地点からのみ検出された。その出土位置からみても、北主体部に安置された石棺材の一部と考えられる。これまでは、北主体部の棺についての資料はほとんど無かったが、北主体部にも、南主体部と同様の竜山石製の長持形石棺が安置されているものと推定される。

次に閃緑岩についてみると、室宮山古墳では、墳丘の葺石および北石室天井石とみられる板石に閃緑岩が用いられている。しかし今回の出土地点が後円部墳頂部A～D地点であることや検出した石材の大きさ・量からみて、そのいずれとも考え難く、別の用途を思慮する必要がある。

今一箇所、閃緑岩が用いられたことが判明しているのは、南主体部の竪穴式石室内である。発掘調査報告書には、石室内の長持形石棺の側壁が外側に倒れることを防ぐために、「拳大の花崗岩の割石によって約45度の傾斜を持つように強固に根固めされ」ていたと記されている。

この花崗岩は閃緑岩のことを指しており、今回採集した閃緑岩の割石は、この大きさにまさに合致する。そして南主体部においては、多くの閃緑岩礫が原位置を保っていたようであり、また、南主体の西小口はほとんど破壊されていたが、東小口は築造当時の状態であったから、南主体の閃緑

岩割石がA地点（後円部円丘壇東端）にまで及ぶことは考え難い。

北主体部においても、前述のように、竜山石製の長持形石棺が収められていたと推定されるのであって、その設置に際しても、南主体部と同様の施設を有していたとみることができる。以上の状況から、これらA～D地点出土の閃緑岩割石は、本来北主体部の石室内で、石棺材の根固めとして用いられたものと考えるのが妥当であろう。

実際、北主体部の位置は、東西4.7m、南北3.5m、深さ0.8mの大きな陥没となっており、石棺材に加え、その根固めのための石材まで、石室の東（A地点）方向か西（C・D地点）方向かを問わず、周囲の攪乱土の中に散乱しているとみられることは、北主体部の遺存状況は極めて悪いものとなっていることを示唆するものである。

さて、A地点(後円部円丘壇東端)では、埴輪片コンテナ3箱（円筒埴輪1－1～8－27など約30個体分、形象埴輪 9－29～12－69など約40個体分)、陶質土器片4個体分（13－70～14－73)、鉄剣片1(14－74）のほか、白色円礫816個（約33kg)、緑色片岩約10kg、閃緑岩約3kgが出土した。

副葬品としての鉄剣の帰属さえ、石室以外の第3の主体部の存在を想定することも可能との意見もあったが、以上の状況から、閃緑岩と緑色片岩が北主体部の構成石材であるとすると、鉄剣(74)は北主体部に帰属する遺物であろうことを疑う余地はない。したがって陶質土器（13－70～14－73)もまた、墳丘上に置かれたなどとするよりも、北主体部の副葬品であった可能性が最も高いといえるだろう。

一方、埴輪（1－1～12－69）は、北主体部の周囲に方形に巡らされたものの一部であり、また、先述のように白色円礫はそこに散布されたものであろう。

A地点の風倒木の根がいくら巨大とはいえ、そこから出土した円筒埴輪片が約30個体分、形象埴輪片が約40個体分、そして白色円礫が33kgというのは異様な数量の多さであるが、これは先述のように、北石室は既に激しい乱掘を被っており、その排土と共に、石室上の幾重にも巡る埴輪列もまた、A地点方向にも多量に掻き出されたと考えるならば、十分に理解可能であろう。

最後に、C地点（後円部石室西）出土の緑色凝灰岩（グリーンタフ）の原石などの帰属の問題がある。碧玉や緑色凝灰岩（グリーンタフ）の原石を副葬する類例は寡聞にして知らないが、これもまた、北石室の激しい乱掘に伴ってC地点の位置まで掻き出されたとみるのが最も妥当な解釈であろう。

第6章　総　括

室宮山古墳においては、昭和25年（1950年）に南主体の発掘調査が行われ、竪穴式石室に安置された豪壮な長持形石棺の存在が明らかになった。その後、前方部北張出部の発掘調査は3次にわたって実施され（泉森・河上1971）（木許・藤田1996）（御所市教育委員会 1997年調査）、墳形復原案（木許1996）の貴重な材料となったが、墳頂部付近は国史跡に指定されていることもあって、昭和25年以降、全く調査の手が及ぶことはなかった。

この度の台風7号は自然災害の恐ろしさをまざまざと見せ付け、室宮山古墳では墳丘上の樹木を200本以上なぎ倒し、根の起きた跡には大きな窪みが生じた。

そのことは史跡の保護上も、また復旧にかかる労苦ならびに経費の点でも不幸なことではあったが、一方で、墳丘上の各所に生じた風倒木の根は、あたかも発掘調査でおこなう坪掘りのごとき役割を果たし、貴重な情報を提供したこともまた確かである。

後円部頂にはおよそ半世紀ぶりに調査のメスが入ったかたちとなり、従来内容のほとんど知られることのなかった後円部北主体部について、結果として、前章の通り、豊富な知見が得られた。

まず、後円部北主体部においても南主体部と同様に、緑色片岩を積み上げた竪穴式石室に竜山石製の長持形石棺が安置され、やはり同様に、石棺は閃緑岩で根固めされていたとみられること、そして、後円部北石室は、残念ながらかなりの部分が乱掘のために破壊されているとみられること、などが推測された。

また、後円部北石室の直上や周囲を方形に巡る埴輪列も、A地点（後円部円丘壇東端）の出土状況にみるごとく、乱掘のために大きく原位置を移動しているものも相当数あることも判った。

埴輪の関係では、従来、古市古墳群の墓山古墳（梅原1934）でしか知られなかった、帯金を段を付けて表現する短甲形埴輪（A地点出土12－64）の存在が明らかになり、また、F地点(鞍部前方部寄り南端)では4本の円筒埴輪が樹立当時の状態を保ったまま根に絡まって出土して、うち1本にBc種のヨコハケ（一瀬1992）を施すもの（21-3）の存在が、それぞれ初めて室宮山古墳においても確認されたことにより、古市古墳群に葬られた大王家の勢力と本墳被葬者は、極めて密接な関係にあったことを改めて認識させることとなった。このほか、いずれもA地点出土の、壺形埴輪（8－28)、衣蓋形埴輪（9－29～10—40)、円柱の家形埴輪（10—45)、鶏または鳥形埴輪（12—67～69)も、室宮山古墳では初めて存在の知られた器種の埴輪である。

そして陶質土器（13－70～14－73)の存在は、何よりも我々を驚かせた。しかも、我が国では類例の知られない船形の陶質土器（13－70)と、さらにもう1点象形土器（13－71)があり、少なくとも4点以上の陶質土器が北主体部には副葬されていたらしいことが判明した。

無論、陶質土器は前期後葉から徐々に我が国にもたらされて古墳に副葬されており、そういった意味では室宮山古墳での出土も、全く予期に反するというわけではないだろう。

しかしながら、少なくとも4点以上、しかもその内に2点も精緻なつくりの象形土器を含んでいるという、いわば質の高さは他に例をみないものであり、室宮山古墳の被葬者ならではの感がある。

南葛城は、奈良盆地にあっては前期古墳の存在が極めて稀薄な地域と評価できるのだが、そうした地域にあって、中期前葉に至って墳長238mという破格の規模と内容を誇る室宮山古墳が突如として出現するのである。その出現の背景には当時の政権の極めて強い政治的意図の存在を疑い得ず、藤田はこのことに関して、新興の和泉・河内の政権が旧来の大和の勢力を牽制するために打ち込んだ、巨大な楔としての機能（藤田1998）を想定した。

塚口義信氏は葛城氏には本来2系統あり、南葛城には葛城襲津彦を含む「玉田宿禰系葛城氏」が、北葛城には「葦田宿禰系葛城氏」が本拠を構えていたことをそれぞれに縁の深い地名から考証し、北葛城の馬見古墳群には大王陵とともに葦田宿禰系葛城氏の墳墓を含む(塚口1984)とするが、藤田も考古学的手法によりこのことについて肯定的理解の概要を記した（藤田1997）ところである。

また、葛城襲津彦は文献史学の上からも実在の人物とされており(井上1956)、時期の上でも合致する室宮山古墳は、彼の奥津城である可能性は非常に高いといえる。

そしてこの時期、倭の軍隊が朝鮮半島に渡り、新羅や高句麗と戦闘状態にあったことは、記紀のみならず、広開土王碑もまた雄弁に物語っている。

さきに象形土器2点を含め4点以上と推定される、我が国では類をみない陶質土器の副葬のありかたに関して、室宮山古墳の被葬者ならではの感があると述べたのは、その被葬者かと目される葛城襲津彦が、度々朝鮮半島に渡って戦を仕掛けたことなどが記紀に記されており（神功5年・62年紀、応神14年紀、仁徳41年紀)、神功62年紀所引の百済記にも沙至比跪の名がみえるからで、もしそうであれば、かつて我が国では出土例の知られなかった、船形をはじめとする2点の象形土器を含む複数の陶質土器を、あるいは戦利品として、あるいは妻への土産などとして持ち帰ることも当然あり得るべきこととみられよう。

なお、神功5年紀には襲津彦は新羅の草羅城を抜いた折りに捕虜を連れ帰り、桑原・佐糜・高宮・忍海(いずれも御所市または新庄町内の地名)に住まわせた旨が記されているのも参考になる。この捕虜の中には技術者が多く含まれていたことが想定（塚口1984）されており、報告した4点の陶質土器もこうして連れ帰ったという技術者に作らせた可能性も考えられなくもないが、少なくとも象形土器2点（13－70・71）は白っぽい灰色の胎土で、一般的な須恵器の色調とは明らかに異なるから、やはり、かの地から持ち帰ったものとみる方が妥当であろう。

ただ、さきの半島への渡海についても、この捕虜を連れ帰ったというエピソードについても、襲津彦に集約されて記紀に伝えられている可能性はあり、本来は玉田宿禰などの事績も含まれている可能性も考慮する必要はあろう。 このほか、C地点出土の緑色凝灰岩(グリーンタフ)の原石についても、北主体部に副葬された可能性を考えた。類例の知られない原石の副葬ではあるが、襲津彦の出身母体となった馬見古墳群(塚口1984)の被葬者は、碧玉製腕飾類の製作にも携わっていた可能性を説いた(藤田1997)ことがある。

補　註

補註１　奥田尚氏によると、ここでいう白色円礫には、チャートと結晶片岩（白色帯）を含んでいる。

補註２　奥田尚氏によると「一般的に竜山石と言われている石材であるが、現在の竜山の石切場では同質の石が見い出せない。むしろ竜山西方の伊保山の石切場では同質の石が多く見られる。伊保山の石も竜山の石も、石材の商品名は竜山石である。」という。

参照・引用文献

秋山日出男・網干善教1959　『室大墓』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第18冊）

泉森皎・河上邦彦1971　「室大墓古墳前方部張出部の調査」『青陵』第18号、橿原考古学研究所

一瀬和夫1992　「古市古墳群における埴輪群の変遷」『究班』、埋蔵文化財研究会

井上光貞1956　「帝記からみた葛城氏」『日本古代国家の研究』、岩波書店

上田　睦1997　「出土埴輪から見た古市古墳群の構成」『堅田直先生古稀記念論文集』

梅原末治1922　「大和御所町附近の遺蹟」『歴史地理』第39巻第4号

1934　『大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第5輯

木許　守1990　『奈良県御所市室　中西遺跡第2次発掘調査報告』（『御所市文化財調査報告』第９集）

1994　『奈良県御所市　楢原遺跡Ⅱ』（『御所市文化財調査報告書』第18集）

1996　「宮山古墳の墳丘とその系譜的位置」『橿原考古学研究所紀要　考古学論攷』第20集）

木許　守・藤田和尊1996　『奈良県御所市　室宮山古墳範囲確認調査報告』（『御所市文化財調査報告書』第20集）

関川尚功1989　「御所市　室大墓古墳外堤」『奈良県遺跡調査概報1988年度』

塚口義信1984　「葛城県と蘇我氏」『続日本紀研究』第231・232号

寺沢薫編1980　『六条山遺跡』（『奈良県文化財調査報告書』第34集）

1986　『矢部遺跡』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第49冊）

藤田和尊1985　「位置と環境」『奈良県御所市室　境谷10号墳発掘調査報告』（『御所市文化財調査報告』第４集）

1994　『奈良県御所市　楢原遺跡Ⅰ』（『御所市文化財調査報告書』第17集）

1997　「葛城氏と馬見古墳群」『日本古代史王権の最前線』、新人物往来社

1998　「中期における政権の所在」『網干善教先生古稀記念考古学論集』

1998　「室宮山古墳」『季刊考古学』第65号、雄山閣出版

藤田和尊・木許守1999　「御所市・室宮山古墳出土の陶質土器」『青陵』第101号、橿原考古学研究所

A地点円筒・朝顔形・壺形埴輪観察表（図３～８、図版４～６）

遺物番号 器種 部位	法量	口縁タガの形態	外面調整	内面調整	色調 ・外面 ・断面 ・内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	チャート	赤色粒	その他	備考
3－1 円筒または朝顔 底部	底部径 22.5cm （残存 1/2 から）	2 a	タテハケ後 ヨコハケBb （9条／cm）	ヨコナデ 指頭押圧	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	LL － S 3	M － S 2	S 3	S 3	M 3	S 2		外面に黒斑
3－2 円筒または朝顔 底部	底部径 24.0cm （残存 1/1 から）	2 a	タテハケ後 ヨコハケ Bb （1単位幅 6.9cm 4条/cm） 底部の調整ア類	ヨコナデ 指頭押圧 底部の調整 ア類	・暗赤褐色 ・暗赤褐色 ・暗赤褐色	M － S 3	M － S 3	S 3	S 3	S 3	S 3		外面に黒斑
4－3 円筒 口縁部		Ⅲa	タテハケ （3条／cm）	ヨコナデ	・暗赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	L － M 4	M 3	S 3	S 2	S 1	M 2		外面に黒斑
4－4 円筒 口縁部		Ⅲa	タテハケ （3条／cm）	ヨコナデ	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	L － M 3	S 3	M － S 3	S 3	0	0		
4－5 円筒または朝顔 体部		3 a	ヨコハケ （7条/cm）	ヨコナデ	・赤褐色 ・赤褐色 ・暗赤褐色	M 3	M － S 3	S 3	S － SS 3	S 3	S 1		円形スカシ
4－6 円筒または朝顔 体部		2 a	ヨコナデ （タガ部分のみの残存）	ヨコナデ	・淡黄褐色 ・暗灰色 ・淡黄褐色	M － S 3	M － S 3	S 3	S － SS 3	M 2	0		
4－7 円筒または朝顔 体部	タガ部径 29.8cm （残存 1/12 から）	2 a	摩滅のため不明	ヨコナデ 指頭押圧	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	L － S 3	S 2	S 3	S － SS 3	0	S 2		
4－8 円筒または朝顔 体都	タガ部径 32.8cm （残存1/11 から）	2 a	ヨコハケ （摩滅のため詳細不明）	ヨコナデ 指頭押圧	・淡赤褐色 ・赤灰褐色 ・淡赤褐色	M 3	M － S 3	S 3	S － SS 3	S 2	S 3		
4－9 円筒または朝顔 体部	タガ部径 37.0cm （残存1/9 から）	2 a	ヨコハケ （摩滅のため詳細不明）	タテ方向ハケ	・淡赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	L － M 3	M 3	M － S 3	S － SS 2	S 2	S 4		
5－10 円筒または朝顔 体部	タガ部径 34.8cm （残存1/10 から）	2 a	不明 （タガ部分周囲のみの残存）	タテ方向ハケ後ヨコナデ	・淡赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	LL － M 3	S 3	M － S 3	S － SS 3	M 2	M － S 4		
5－11 円筒または朝顔 体部	タガ部径 30.2cm （残存1/5 から）	2 a?	ヨコハケ （3条･7条/cm）	ヨコナデ 指頭押圧	・赤褐色 ・淡赤褐色 ・赤褐色	L － M 3	S 3	M 3	M － S 3	M 2	M － S 3		
5－12 円筒または朝顔 体部	タガ部径 30.1cm （残存1/3 から）	2 a	タテハケ後 ヨコハケ Ca （4条／cm）	ヨコナデ 指頭押圧	・淡赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	M － S 3	S 3	S 3	S 3	M 2	S 2		外面に黒斑
6－13 円筒または朝顔 体部	タガ部径 28.5cm （残存 1/4 から）	2 a	ヨコハケCa？ （4条･8条/cm）	ヨコナデ 指頭押圧	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	L － M 3	S 2	S 3	S － SS 3	M 3	S 3		円形スカシ
6－14 円筒または朝顔 体都	タガ部径 31.2cm （残存1/4 から）	3 a	ヨコハケ B （5条／cm）	ヨコナデ 指頭押圧	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	M － S 2	M － S 3	S 2	S － SS 3	M 2	M 3		外面に黒斑
6－15 円筒または朝顔 体部	タガ部径 30.4cm （残存1/4 から）	2 a	ヨコハケ Ca? （4条／cm）	ヨコナデ 指頭押圧	・赤褐色 ・赤褐色 ・淡赤褐色	M － S 2	M － S 2	M 3	S － SS 3	M 2	M 3		外面に黒斑

遺物番号 器種 部位	法量	口縁 タガの 形態	外面調整	内面調整	色調 ・外面 ・断面 ・内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	チャート	赤色粒	その他	備考
6−16 円筒または朝顔 体部	タガ部径 35.0cm (残存1/10 から)	2 a	ヨコハケ (5条/cm)	指頭押圧	・赤褐色 ・淡赤褐色 ・淡赤褐色	M 2	M−S 2	M 3	M−SS 3	M−S 3	M 2		
7−17 朝顔形 口縁部	口径 29.8cm (残存1/10 から)		タテ方向ハケ (10条/cm)	ヨコハケ ヨコナデ	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	L−M 3	M 3	S 2	S 4	S 1	M 3		
7−18 朝顔形 口縁部	口径 39.0cm (残存1/5 から)		タテ方向ハケ (8条/cm)	ヨコハケ ヨコナデ	・黄褐色 ・黄褐色 ・赤褐色	L−M 3	S 2	M 3	S−SS 2	M 3	M 2		外面に赤色顔料塗布
7−19 朝顔形 口縁部			タテ方向ハケ (8条/cm)	ヨコハケ ヨコナデ	・暗赤褐色 ・暗赤褐色 ・暗赤褐色	S 2	S 2	M 3	S 3	M 2	M 2		
7−20 朝顔形 口縁部			タテ方向ハケ (8条/cm)	ヨコナデ	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	M 2	S 2	M 3	SS 1	M 1	M 2		
7−21 朝顔形 口縁部			ヨコナデ	ヨコナデ	・淡赤褐色 ・淡赤褐色 ・淡赤褐色	L−M 3	S 1	M 3	S−SS 3	M 1	M−S 2		
7−22 朝顔形 口縁部	タガ部径 33.0cm (残存1/15 から)		ヨコナデ	ヨコナデ	・淡赤褐色 ・淡赤褐色 ・淡赤褐色	L−M 3	S 1	M 3	S−SS 3	M 1	M−S 3		
7−23 朝顔形 口縁部	残存部径 28.0cm (残存1/5 から)		タテ方向ハケ (4条・5条/cm)	ヨコハケ (摩滅のため詳細不明)	・黄褐色 ・赤褐色 ・黄灰褐色	M 3	M−S 2	M 3	M−S 3	M 2	M−S 3		
8−24 円筒または朝顔 底部	底部径 20.0cm (残存1/8 から)		タテハケ (6条/cm) 底部の調整ア類	ナデ	・赤褐色 ・赤褐色 ・黄灰色	M 3	M−S 3	M 3	M−S 3	M 2	M−S 3		
8−25 円筒または朝顔 底部	底部径 24.7cm (残存1/13 から)		タテハケ (5条/cm) 底部の調整ア類	ナデ 底部の調整 ア類	・赤褐色 ・赤褐色 ・黄灰色	M−S 3	M 3	M 3	S 3	M 2	M 3		
8−26 円筒または朝顔 底部	底部径 24.0cm (残存1/15 から)		ヨコハケ (摩滅のため詳細不明) 底部の調整不詳	ナデ 底部の調整 ア類	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	M 3	M 3	M 2	S−SS 3	M 2	M 2		
8−27 円筒または朝顔 底部	底部径 24.2cm(残存1/3 から)		タテハケ後 ヨコハケ	ナデ 底部の調整 ア類	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	L−M 3	M 3	M 3	L−M 3	M 2	M−S 3		
8−28 壺形 底部	底部径 19.0cm (残存1/9 から)		タテ方向ハケ (5条/cm)	タテ方向 ハケ	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	M−S 3	S 2	S 1	S−SS 3	M 2	S 2		

A地点形象埴観察表（図９～12、図版７～９）

遺物番号 器種 部位	外面調整	内面調整	色調 ・外面 ・断面 ・内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	チャート	赤色粒	その他	備考
9－29 衣蓋形 飾り板の鰭	表裏ともに沈線で上縁を縁取りし、文様を表現する。										
	ナデ	―	・赤褐色 ・黄褐色 ・黒灰色 ・―	L－S4	L－S3	S3	S3	0	M－S3		
9－30 衣蓋形 軸受け部上端	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰褐色 ・赤褐色	L－S3	L－S3	S3	S3	S1	S2		
9－31 衣蓋形 飾り板受部	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰黄色 ・赤褐色	L－S3	L－S3	S3	S3	0	S3		
9－32 衣蓋形 飾り板受部	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰褐色 ・赤褐色	L－S4	L－S3	S3	S3	0	S3		
9－33 衣蓋形 軸	ナデ	ナデ	・褐黄色 ・黒灰色 ・褐黄色	L－S3	L－S3	S3	S2	M2	S3		
9－34 衣蓋形 軸受部	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・黒灰色 ・赤褐色	L－S3	L－S3	S3	S2	S2	S3		
9－35 衣蓋形 衣蓋部と台部 接合部	幅1.5cmの２本単位の沈線を放射状に施す。										
	ヨコハケ （6条／cm）	ナデ	・赤褐色 ・灰黒色 ・赤褐色	LL－S3	LL－S3	S3	S3	0	M－S3		
9－36 衣蓋形 衣蓋部と台部 接合部	幅1.1cmの２本単位の沈線を放射状に施す。										
	ヨコハケ？	ナデ	・赤褐色 ・灰黒色 ・赤褐色	L－S4	LL－S3	S3	S3	0	M－S3		
9－37 衣蓋形 衣蓋部と台部 接合部	横沈線の下に幅0.6cmの２本単位の沈線を放射状に施す。										
	ナナメハケ （8条／cm）	ナデ	・赤褐色 ・灰黒色 ・褐色	L－S3	M－S3	S3	S3	0	M－S3		
9－38 衣蓋形 衣蓋部	幅0.8cmの２本単位の沈線を横線を介して互い違いの位置に施す。										
	ヨコハケ （8条／cm）	ナデ	・赤褐色 ・灰黒色 ・赤褐色	L－S3	L－S3	M－S3	S3	M－S2	M－S3		38～40は同一個体か
10－39 衣蓋形 衣蓋部	幅1.3cmの２本単位の沈縁の下に横線。										
	ヨコハケ （8条／cm）	ナデ	・赤褐色 ・灰褐色 ・赤褐色	L－S3	L－S3	S3	S3	M－S1	S3		38～40は同一個体か
10－40 衣蓋形 衣蓋先端部	２本単位の沈線とみられる。										
	ヨコハケ （摩滅著しい）	ナデ	・赤褐色 ・灰褐色 ・赤褐色	L－S3	L－S3	S3	M－S3	M－S1	S3		38～40は同一個体か
10－41 家形 鰭飾り	1.3cm幅で横方向に２本の沈線を施す。										
	ナデ	ナデ	・褐赤色 ・灰黒色 ・赤褐色	M－S3	LL－S3	S3	S3	M－S2	M－S3		
10－42 家形（入母屋造） 下屋根部	上屋根部は剥離。沈線を3条施した下に、幅5.7cmの竪押縁突帯と網代（綾杉文）。										
	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰褐色 ・黄褐色	LL－S3	LL－S3	S3	S3	M－S2	M－S3		

遺物番号 器種 部位	外面調整	内面調整	色調 ・外面 ・断面 ・内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	チャート	赤色粒	その他	備考
10－43 家形 屋根部	網代(綾杉文)の沈線は3mm程度の深さまで刻まれており、深い。										
	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰褐色 ・赤褐色	L－S 3	L－S 3	S 3	S 3	M－S 2	M－S 3		
10－44 家形 屋根部	竪押縁突帯の幅は2.0cmとやや細め。網代(綾杉文)の表現はやや雑。										
	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰褐色 ・赤褐色	LL－S 3	LL－S 3	S 3	S 3	S 1	M－S 3		
10－45 家形 柱の縁台部の背面	幅3.9cmの帯状のものが貼り付いた痕跡があり、その中央に基準線となる 沈線がある。図示の左端で、貼り付いた粘土帯はひとたび途切れる。										
	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰褐色 ・褐黄色	L－S 3	L－S 3	S 3	S 3	S 2	S 2		
10－46 家形 縁台（裾廻り突帯）	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰褐色 ・褐色	M－S 3	M－S 3	S 2	S 3	S 2	M－S 3		
10－47 盾形 盾部	円筒部との接合部。										
	ナデ	ナデ	・褐色 ・灰黒色 ・赤褐色	L－S 3	LL－S 3	S 3	S 3	S 2	M－S 3		外面に 黒斑 48と同一 個体か
10－48 盾形 盾部	ナデ	ナデ	・褐色 ・灰黒色 ・赤褐色	LL－S 3	L－S 3	S 3	S 3	S 2	M－S 3		外面に 黒斑 47と同一 個体か
10－49 盾形? 盾部?	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰黄色 ・赤褐色	L－S 3	LL－S 3	M－S 3	S 3	S 2	M－S 3		
11－50 盾形 盾部	円筒部との接合部。										
	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰黄色 ・赤褐色	L－S 3	LL－S 3	S 2	S 3	S 3	M－S 3		
11－51 盾形 盾部	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰黄色 ・赤褐色	L－S 3	L－S 3	S 2	S 2	S 1	M－S 3		
11－52 盾形 盾部	円筒部との接合部。										
	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰黒色 ・赤褐色	L－S 3	LL－S 3	S 3	S 3	0	M－S 3		
11－53 盾形 盾部	ナデ	ナデ	・褐色 ・灰黄色 ・赤褐色	L－S 3	L－S 3	S 3	S 3	M－S 3	M－S 3		
11－54 盾形 円筒部	盾部との接合部。盾部はタガ（下から3段目？）の上から接合され、 これより上位が盾部となる。										
	下段タテハケ （8条／cm） 上段ヨコハケ のちナデ		・赤褐色 ・灰黒色 ・赤褐色	L－S 3	L－S 3	S 3	S 3	0	M－S 3		
11－55 盾形または靫形 円筒部	タガ径32.4cm(残存1/5からの回転復元)。器厚2.1cm。										
	B種ヨコハケ （5条／cm） 左から右。	ナデ	・赤褐色 ・灰黒色 ・赤褐色	LL－S 3	LL－S 3	S 3	S 3	S 2	M－S 3		
11－56 靫形 背負板部	最上段または最下段。										
	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰黒色 ・赤褐色	LL－S 3	LL－S 3	S 3	S 3	M－S 3	M－S 3		

遺物番号 器種 部位	外面調整	内面調整	色調 ・外面 ・断面 ・内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	チャート	赤色粒	その他	備考
11－57 鞆形 背負板部または鰭部	2本単位の沈線の組合せ。幅1.6cmの縦線、幅3.1cmの横線、幅3.1cmの縦線。										
	ヨコハケのち ナデ	ナデ	・褐赤色 ・灰黒色 ・褐赤色	L－S 4	L－S 3	S 3	S 3	0	M－S 3		外面に 黒斑
11－58 鞆形 背負板部	最上段。直弧文を沈線で表現する。										
	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰褐色 ・赤褐色	LL－S 3	LL－S 3	S 3	M－S 3	0	M－S 3		外面に 黒斑
12－59 鞆形 鰭部	円筒部タガとの接合部。										
	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰褐色 ・赤褐色	L－S 3	L－S 3	S 3	S 3	S 3	M－S 3		
12－60 鞆形 背負板部	図示状態の右上に円形に巡る剥離痕。										
	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・褐灰色 ・赤褐色	L－S 3	LL－S 3	S 3	S 3	S 3	M－S 3		
12－61 鞆形 鰭最下部	裏面に幅3.5㎜の先の平らな工具による刺突痕。										
	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・黒灰色 ・赤褐色	L－S 3	L－S 3	S 3	S 3	0	M－S 3		
12－62 鞆形 鰭最下部	ナデ	ナデ	・褐色 ・灰褐色 ・赤褐色	LL－S 3	L－S 3	S 3	S 3	S 3	S 3		
12－63 鞆形 鰭最下部	タテハケのち ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰黒色 ・赤褐色	L－S 3	LL－S 3	S 3	S 3	0	M－S 3		外面に 黒斑
12－64 甲冑（短甲）形 帯金と地板	帯金は突帯で表現し、三角形の地板を沈線で描く。										
	ナデ	ナデ	・黄褐色 ・黒灰色 ・赤褐色	L－S 3	LL－S 3	S 3	S 3	S 2	S 3		
12－65 甲冑（短甲）形 押付板と覆輪	斜格子文で覆輪を表現する。										
	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・黒灰色 ・赤褐色	L－S 3	L－S 3	S 3	S 3	S 2	S 3		外面に 黒斑
12－66 甲冑（冑）形 綴の覆輪部	わずかに左右方向に彎曲する板綴の下端部。突帯と段で覆輪を表現する。										
	ナデ	ナデ	・黒灰色 ・黒灰色 ・褐黄色	LL－S 3	LL－S 3	S 3	M－S 3	0	L－S 3		外面に 黒斑
12－67 鶏形？ 羽？	本体との接合部。2条の沈線。										
	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰褐色 ・赤褐色	M－S 3	M－S 3	S 3	S 3	S 2	S 3		
12－68 鶏形 鶏冠（トサカ）	ナデ	―	・赤褐色 褐色 ・灰黒色 ・―	M－S 3	L－S 3	S 3	S 3	S 2	S 3		
	浅く太い線										
12－69 鳥形 羽	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰褐色 ・赤褐色	M－S 3	M－S 3	S 3	S 3	0	S 3		

B地点円筒・朝顔形埴輪観察表（図16、図版13）

遺物番号 器種 部位	法量	口縁タガの形態	外面調整	内面調整	色調 ・外面 ・断面 ・内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	チャート	赤色粒	その他	備考
16－1 円筒か朝顔 体部	底部径 22.5cm （残存1/2から）	2a	タテハケ後 ヨコハケ Bb （9条／cm）	ヨコナデ 指頭押圧	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	L－S 3	L－S 3	S 3	S 3	S 2	S 2		

B地点形象埴輪観察表（図16、図版13）

遺物番号 器種 部位	外面調整	内面調整	色調 ・外面 ・断面 ・内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	チャート	赤色粒	その他	備考
16－2 衣蓋形 軸	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰黒色 ・褐色	LL－S 3	L－S 3	S 3	S 3	 0	S 2		
16－3 家形 縁台（裾廻り突帯）	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰黄色 ・赤褐色	L－S 3	L－S 3	S 3	S 3	S 3	M 3		外面に黒斑
16－4 家形 基部	ハケメ （9条／cm）	ナデ	・赤褐色 ・灰褐色 ・赤褐色	M－S 3	L－S 3	S 3	S 3	M－S 2	M－S 3		
16－5 家形 押縁突帯	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・黒灰色 ・赤褐色	L－S 3	L－S 3	S 3	S 3	M－S 2	M－S 3		
16－6 家形 屋根部	押縁突帯の上に鰭飾り。										
	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰黒色 ・赤褐色	LL－S 3	LL－S 3	S 3	S 3	 0	M－S 3		
16－7 盾形 盾部	線刻は2.5mmの深さがあり、深い。										
	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰黄色 ・赤褐色	L－S 3	L－S 3	S 2	S 2	S 2	M－S 3		
16－8 不明	段を有して3条の平行する線刻を施す。										
	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰黒色 ・赤褐色	L－S 3	LL－S 3	S 3	S 3	 0	M－S 3		

E地点円筒・朝顔形埴輪観察表（図20、図版14）

遺物番号 器種 部位	法量	口縁タガの形態	外面調整	内面調整	色調 ・外面 ・断面 ・内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	チャート	赤色粒	その他	備考
20－1 朝顔形 口縁部から頸部	タガ径 30.2cm （残存1/9から）		ナナメハケ （6条/cm） ヨコナデ	ナナメハケ （6条/cm）	・赤褐色 ・灰黄色 ・赤褐色	L ｜ S 3	L ｜ S 3	S 3	S 2	M 3	S 3		
20－2 朝顔形 肩部から肩部突帯	タガ径 17.2cm （残存1/8から）		摩滅著しく不明	摩滅著しく不明	・赤褐色 ・暗灰色 ・褐赤色	LL ｜ S 3	LL ｜ S 3	S 3	S 3	0	L ｜ S 3		
20－3 朝顔形 口縁部から口縁部突帯			摩滅著しく不明	摩滅著しく不明	・赤褐色 ・灰褐色 ・赤褐色	LL ｜ S 3	LL ｜ S 3	S 3	S 3	0	M ｜ S 3		
20－4 朝顔形? 肩部付近?	タガ径 18.6cm （残存1/6から）		ヨコナデ	ヨコナデ	・黄褐色 ・灰黄色 ・赤褐色	LL ｜ S 3	LL ｜ S 3	S 3	S 2	M ｜ S 3	S 2		
20－5 円筒または朝顔体部	タガ径 35.0cm （残存1/18から）	2a	ヨコハケ （8条/cm）	ナデ	・赤褐色 ・灰黄色 ・黄褐色	M ｜ S 3	M ｜ S 3	S 3	M 3	M ｜ S 2	S 2		

E地点形象埴輪観察表（図20、図版14）

遺物番号 器種 部位	外面調整	内面調整	色調 ・外面 ・断面 ・内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	チャート	赤色粒	その他	備考
20－6 家形 屋根部 （障泥板剥離）	ナデ	ナデ	・褐色 ・灰褐色 ・褐色	LL ｜ S 3	LL ｜ S 3	S 3	S 3	S 2	M ｜ S 3		

E地点円筒・朝顔形埴輪観察表（図21～22、図版15～16）

遺物番号 器種 部位	法量	口縁タガの形態	外面調整	内面調整	色調 ・外面 ・断面 ・内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	チャート	赤色粒	その他	備考
21－1 朝顔形 口縁部			タテ方向ハケ後 ヨコ方向ハケ (8条/cm)		・赤褐色 ・赤黄褐色 ・赤黄褐色	M 2	S 1	S 2	S ｜ SS 3	M 2	S 2		外面に赤色顔料塗布
21－2 円筒または朝顔 底部	底部径 22.4cm		タテハケ後 ヨコハケCa (8条/cm) 底部の調整 ウ類	タテハケ ナデ 指頭押圧 底部の調整 ア類	・白灰黄色 ・暗灰色 ・灰黄色	M 3	S 1	S 2	M 3	M 2	S 1		外面に黒斑
21－3 円筒または朝顔 底部	底部径 28.3cm	2a	タテハケ後 ヨコハケBe (11条/cm)	ヨコナデ ナデ 指頭押圧	・赤黄褐色 ・黄褐色 ・赤褐色	M 3	S 3	S 2	M 2	M 1	S 1		外面に黒斑
22－4 円筒または朝顔 底部	底部径 24.0cm	2a	タテハケ後 ヨコハケBb (10条/cm) 底部の調整 ア類	ナデ 指頭押圧 底部の調整 ア類	・黄褐色 ・黄灰褐色 ・黄赤褐色	L ｜ M 3	M 2	M 2	M 2	M 3	S 2		外面に黒斑
22－5 円筒または朝顔 底部	底部径 23.2cm	1a	タテハケ (7条/cm) 底部の調整 ア類	ナデ 指頭押圧 底部の調整 ア類	・黄赤褐色 ・黄褐色 ・赤褐色	M 2	M 3	S 3	M 3	M 2	S 1		外面に黒斑

付載　巨勢山303号墳出土の遺物

1．契機と経過

平成10年（1998年）12月、御所市多田在住の吉川廣一氏が、同氏所有の御所市西寺田566番地の山林で出土したという須恵器杯蓋２個体、壺１個体を、御所市教育委員会に届け出られた。同地は巨勢山303号墳にあたる。吉川氏によれば、周辺地においては同年９月の台風７号の被害を受け、尾根上の多くの樹木が倒れた。その後、倒木の処理を行っていたところ、木の根に絡んでこれらの土器が出土したとのことであった。そこで、翌日、吉川氏と共に現地に赴き、遺物出土状況と古墳に関する被害のあらましを確認した。

巨勢山303号墳位置図

巨勢山303号墳は、径10ｍばかりの円墳である。墳丘上には檜が植林されており、それが倒れることで木の根の部分に径１ｍ弱、深さ20㎝程の窪みが数箇所で生じていた。全体としては、根がやや浅いことが幸いして、墳丘そのものへの影響は比較的少ないと思われた。

遺物は、そのような木の根部分の窪みから出土した。その地点は、墳頂部中央よりやや東寄りで、その周囲は木の根によって攪乱されていた。深さはやはり現地表から20㎝程であった。そこで新たな掘削などは行わず、この攪乱土のみを、観察しつつ除去すると、さらに１個体の須恵器杯蓋とそれとは別個体の破片が出土した。そしてその破片は先に採取され届けられていたものと接合できた。杯蓋は合計３個体になった。

以上の状況から、副葬時の土器の配置など細部は不明ながら、これらの遺物はいずれも現表土下20㎝までの地点で出土したものと判断できる。

その年代観は、後述するとおりであるが、墳頂中央ではなく、かつ、極浅い地点での出土であることからみて、これらの土器は追葬に伴うものであった可能性がある。その場合には、本墳の築造時期は６世紀前葉以前に求めなければならないだろう。

なお、出土遺物は、吉川廣一氏の申出によって、御所市教育委員会で一括して保管している。吉川氏のご厚意に感謝申し上げる。　（この項、木許）

2．出土遺物

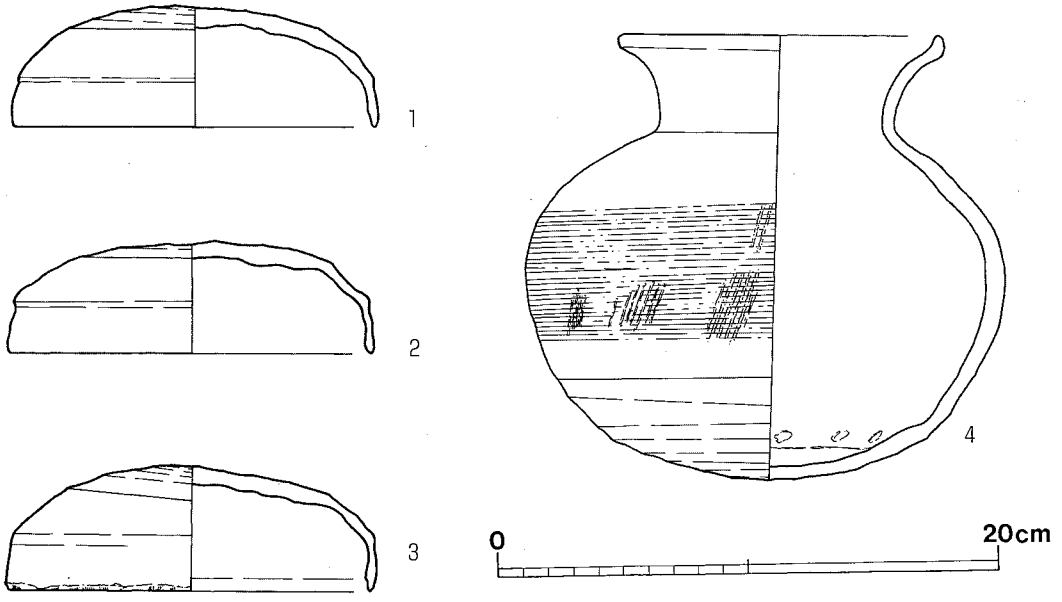
（1）は杯蓋で、口径14.6cm、器高4.7cm。焼成は良好で、色調は暗灰紫色を呈する。天井部と口縁部との境界には凹線を有しているが、鈍く、不明瞭なものである。口縁端部は内傾する面を有し、部分的に凹線が施されている。内面中央には一定方向のナデが認められる。ロクロの回転方向は右回りである。

（2）は杯蓋で、口径 14.7cm、器高4.4cm。焼成は良好で色調は暗灰紫色を呈する。天井部と口縁部との境界には鈍い稜を有する。口縁端部は内傾する面を有し、部分的に不明瞭な凹線が施されている。内面中央には一定方向のナデが認められる。ロクロの回転方向は右回りである。

（3）は杯蓋で、口径14.8cm、器高4.9cm。焼成は良好で、色調は灰紫色を呈する。天井部と口縁部との境界には鈍い稜を有する。口縁端部は内傾する面を有し、不明瞭な凹線が部分的に施されている。また、端部外面はハケ状工具によって面取り風に仕上げられている。このハケ状工具は、端部先端から天井部の方向に向かって動いており、この行為が繰り返されながら完周している。内面中央には一定方向のナデが認められる。ロクロの回転方向は右回りである。

（4）は壺で、口径12.6cm、器高17.8cm、体部最大径19.2cm。焼成は良好で、色調は灰黄色を呈する。やや横長の楕円形の器体に、外反する頸部を有し、口縁端部は上方に向かってわずかにつまみ出されている。底部は回転ヘラケズリによる調整である。体部外面は平行タタキが施された後、カキメ調整が行われているが、ナデによって部分的に消えている。内面はナデによる調整である。

また底部内面の中心から半径約 4.5cmの円弧上に並んで、7箇所の剥離痕が認められる。このうち顕著な3箇所は長径約8mm、短径約5～7mmの不整形な楕円形を呈し、深さは1.5mm前後である。



巨勢山303号墳出土遺物（S.＝1／3）

さて、(1)～(3)の杯蓋は、口径・器高がほぼ同じだが、細部は異なる。天井部と口縁部との境界に鈍い稜を有する(2)・(3)に対して、(1)は凹線がめぐっている。また(2)・(3)の稜の形態はいずれも鈍く、あまいもので、(3)は(2)よりも更に不明瞭なものである。口縁端部はいずれも内傾する面を有し、浅い凹線が施されているのだが、完周していない。したがって、この工程があまり重視されなくなっていたと考えられる。

(3)の口縁端部外面に見られる面取り風の処理に関しては、どういう目的で行われたものか判らないが、天井部外面のヘラケズリ、あるいは天井部と口縁部の境界に稜を作る段階において、口縁端部を下に向けて置いた時、自重で崩れた端部を整形するために施された処理の可能性がある。また、『陶邑古窯址群Ⅰ』(田辺1966)の中で、ＴＫ212とＴＫ217の杯蓋のうち、口縁端部外面を斜めにハケメ状の条線がめぐっているものがあると報告されているが、これらにも関係があるかもしれない。

(4)の底部内面に見られる剥離痕に関しては、その色調を見ると、器壁の内外面が灰黄色を呈しているのに対し、青灰色を呈している。このことから焼成後に剥離したと考えられる。おそらく焼成段階において、壺の安定を保つために底部内面に石、あるいは壁体の一部などの重しを入れた状態で焼成が行われ、焼成後、重しを取り出す際に熔着した器壁が一部はがれた結果ではないかと考えられる。

以上に述べてきた須恵器は、杯蓋の形態から、ＴＫ10型式(田辺1966)に相当するものと思われる。

(この項、相見)

(文献)

田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群Ⅰ』(『平安学園考古学クラブ研究報告』第4号)

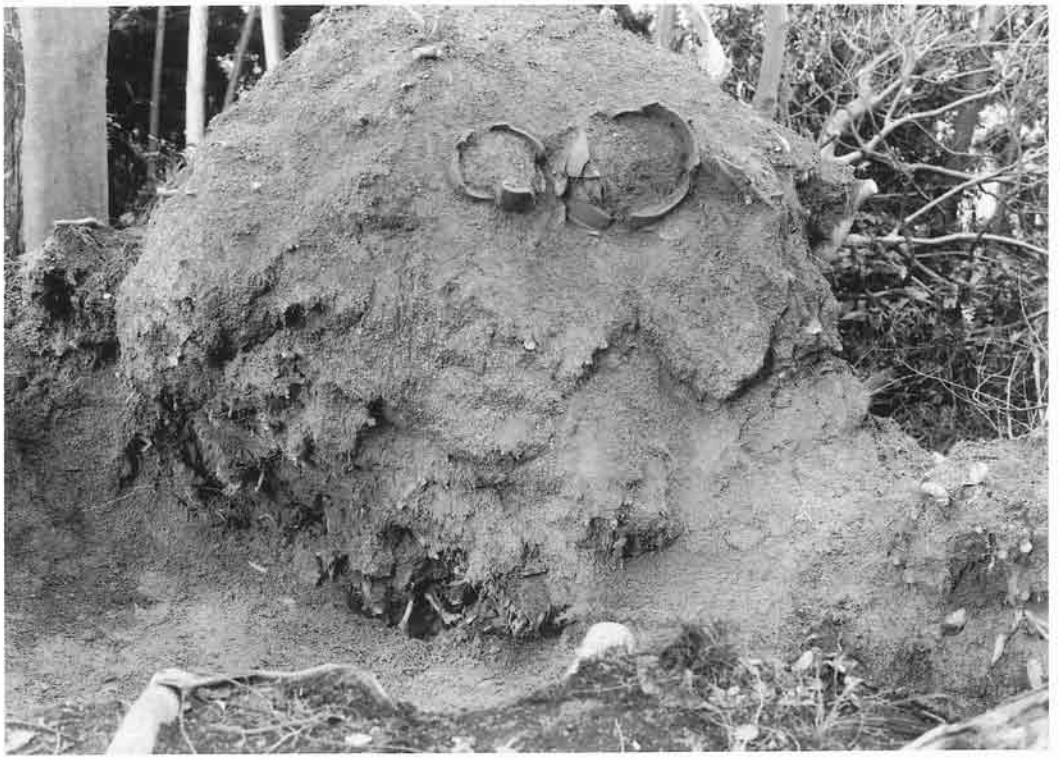
1.台風直後の墳丘（南から）

2.後円部頂部の状況

図版2

1.後円部北主体部周囲の状況

2.前方部頂部の状況（後円部側から）



1.A地点（後円部円丘檀東端）の埴輪列

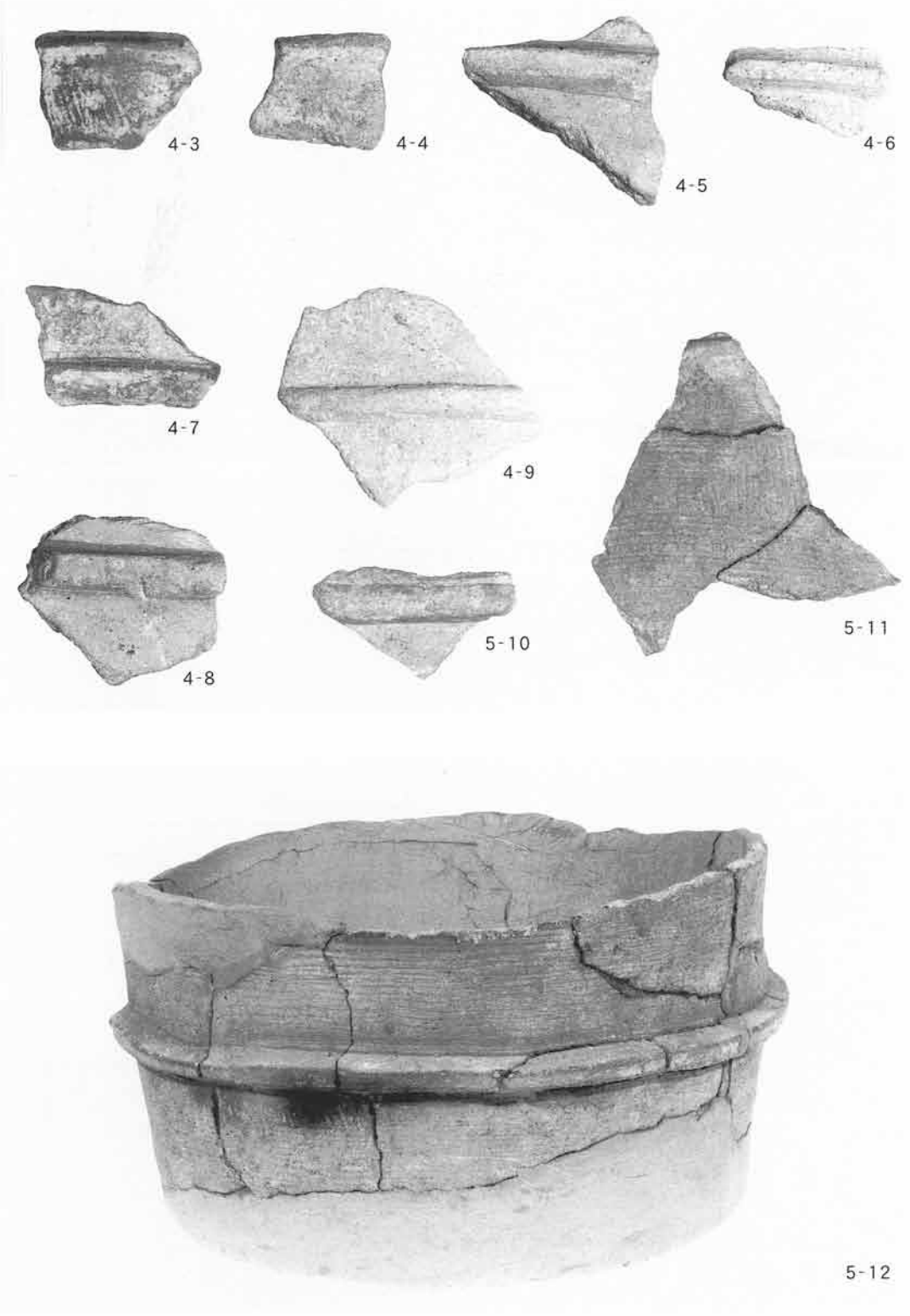
2.F地点（鞍部前方部寄り南端）の埴輪列

図版4

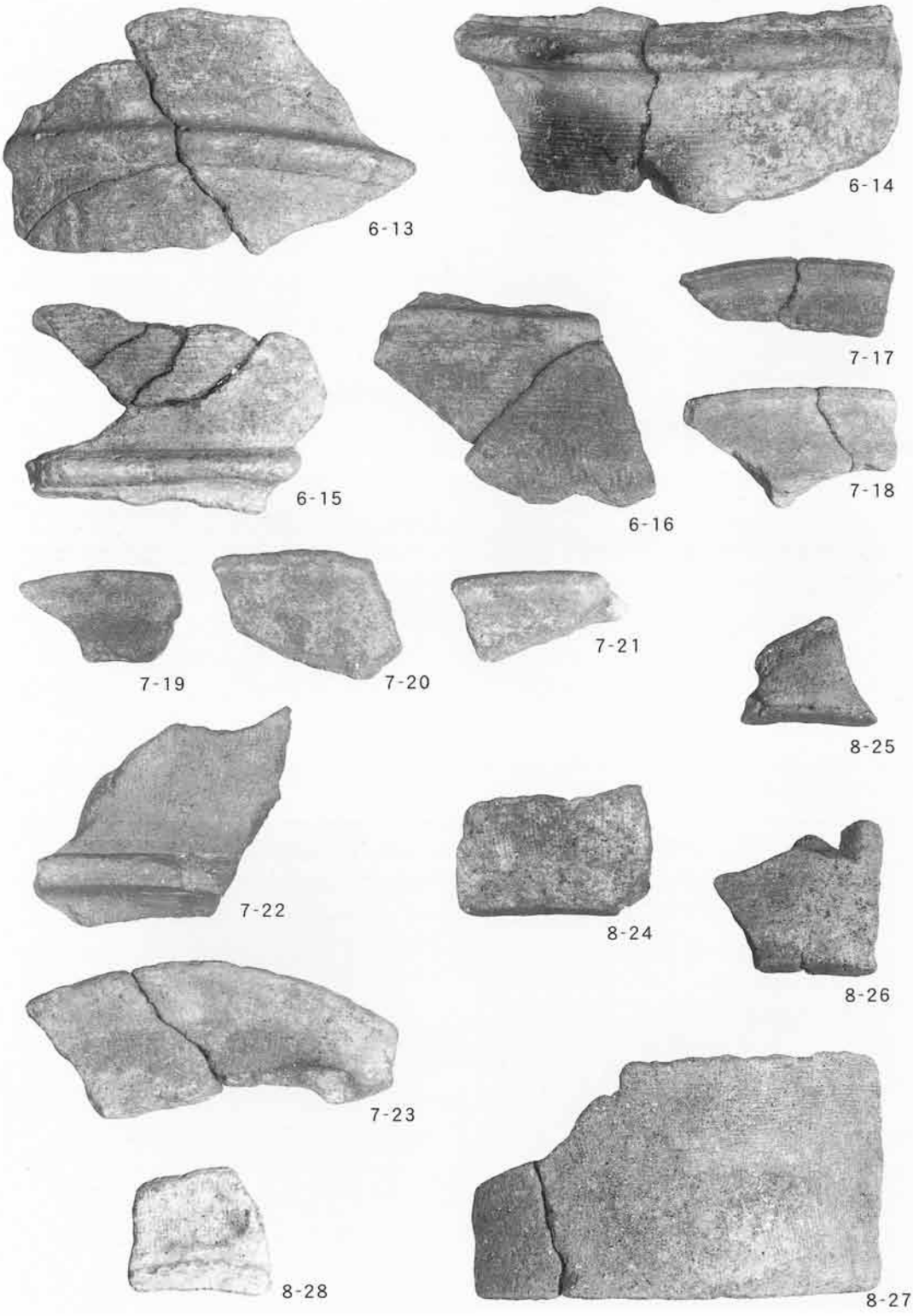
3-1

3-2

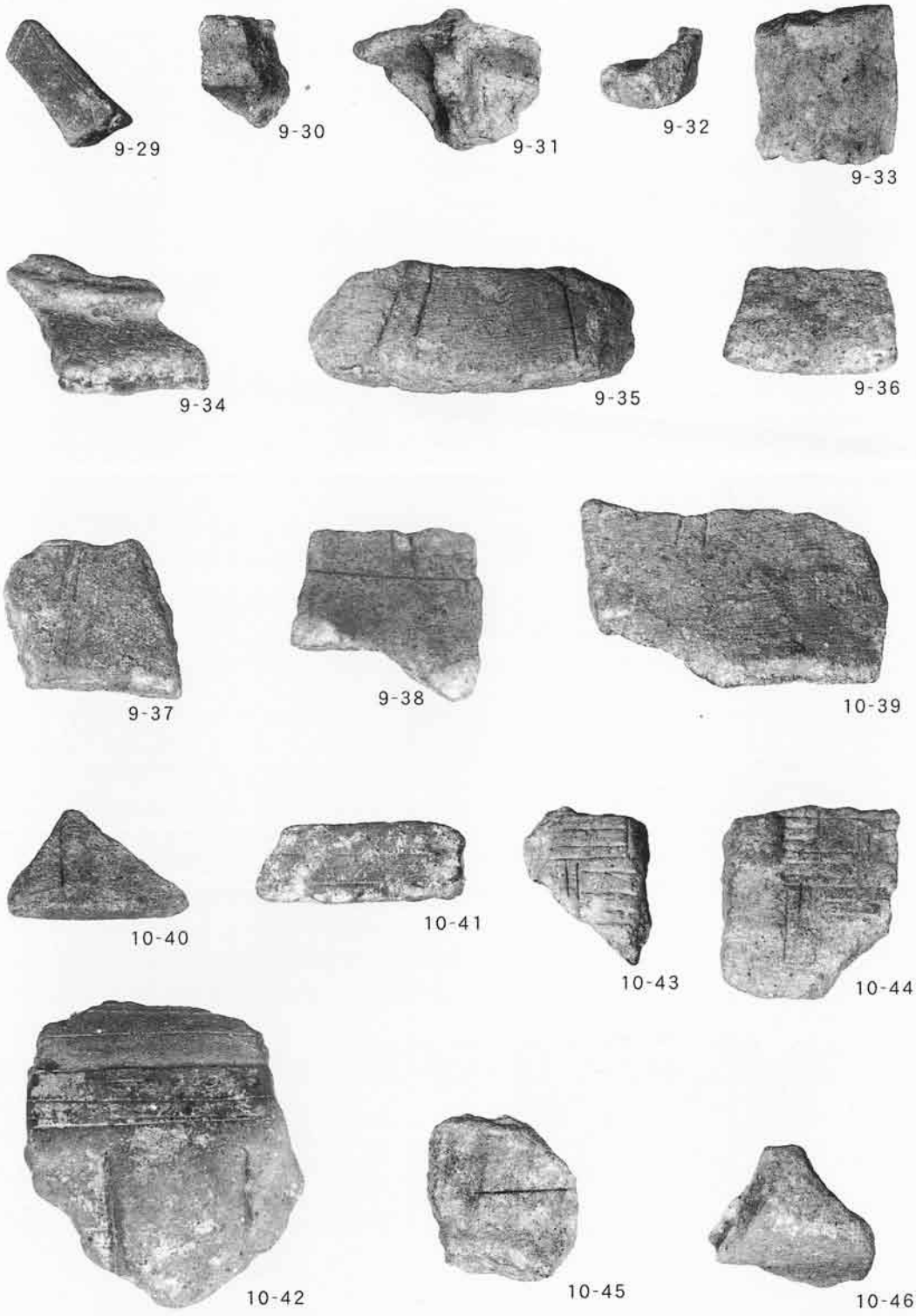
A地点（後円部円丘檀東端）出土　円筒・朝顔形埴輪（その1）
（S.≒1/3）



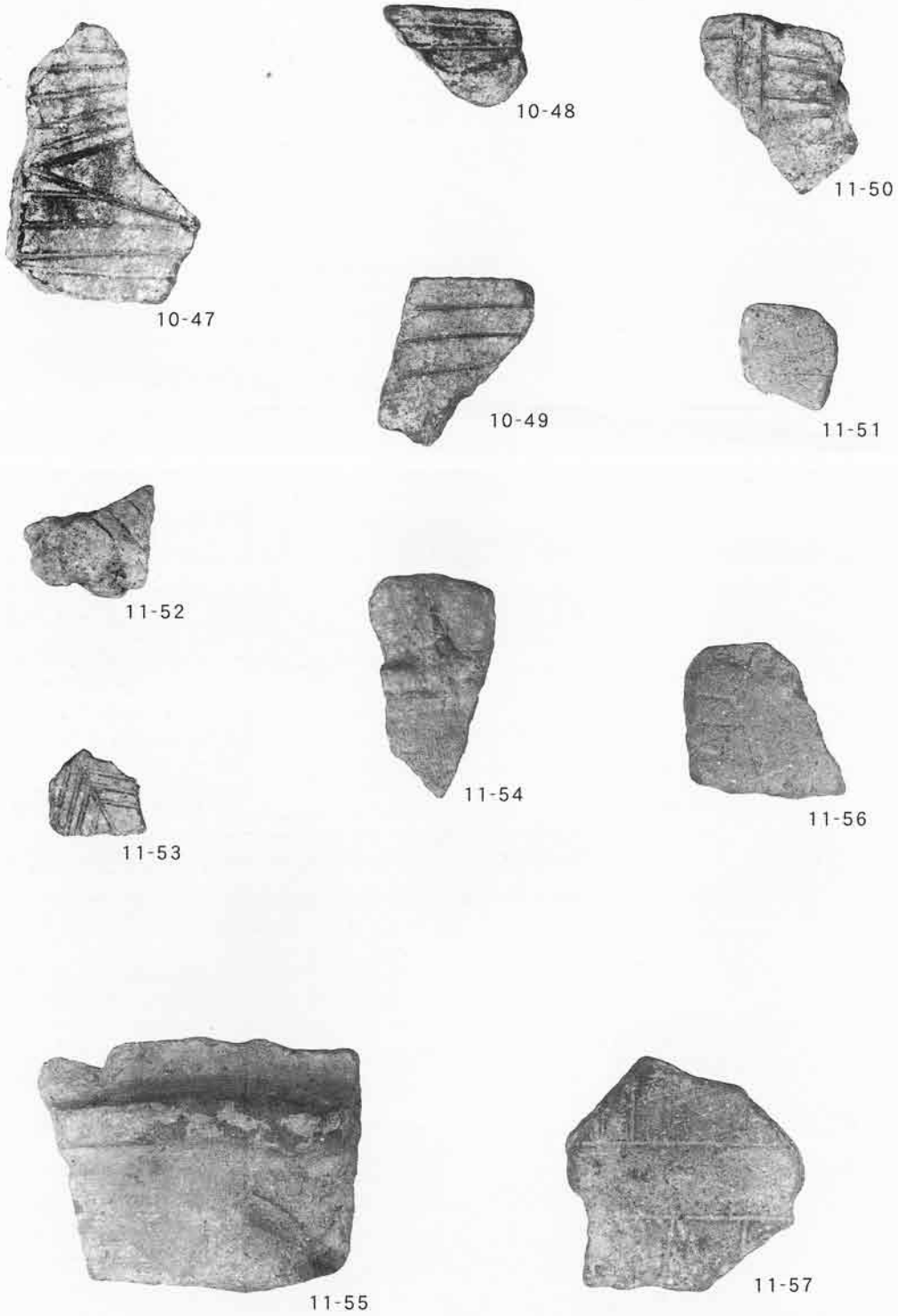
A地点（後円部円丘檀東端）出土　円筒・朝顔形埴輪（その2）
（S.≒1/3）



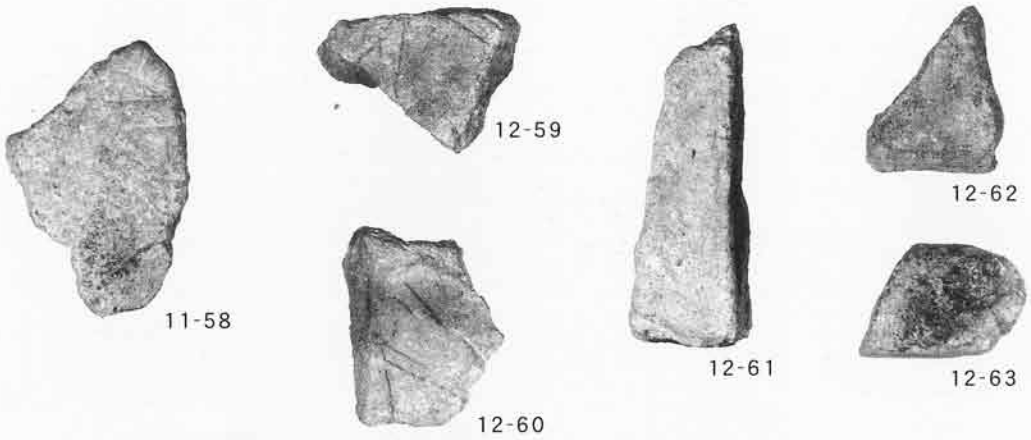
A地点(後円部円丘檀東端)出土　円筒・朝顔形埴輪(その3)および壺形埴輪
(S.≒1/3)

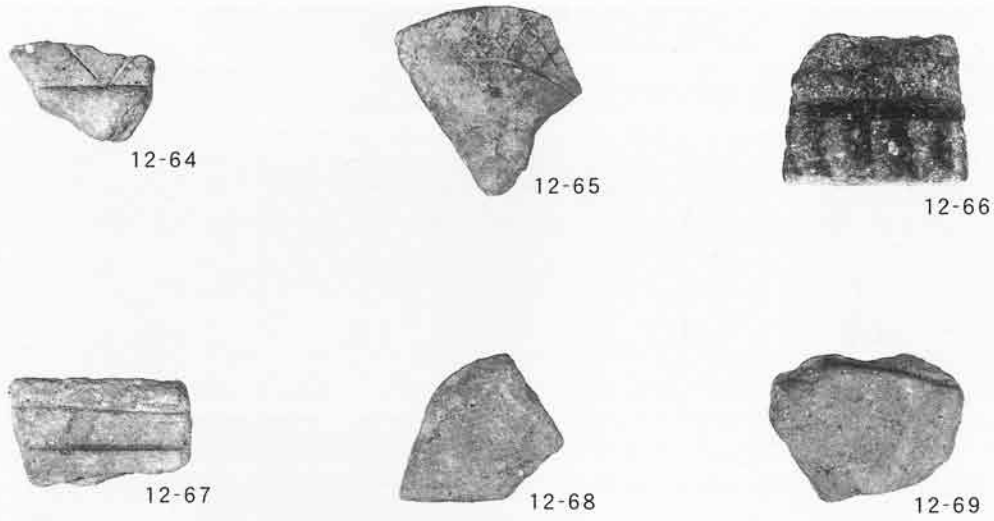


A地点（後円部円丘檀東端）出土　衣蓋形・家形埴輪
（S.≒1/3）



A地点(後円部円丘檀東端)出土　盾形埴輪
(S.≒1/3)





A地点（後円部円丘檀東端）出土　靫形・甲冑形・鳥形埴輪
（S.≒1/3）

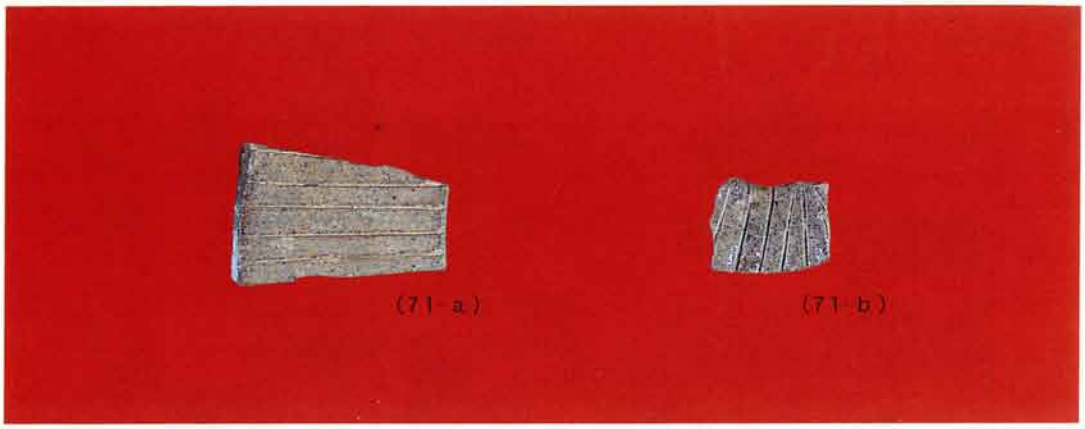
A地点（後円部円丘檀東端）出土　鉄剣
（S.≒1/3）

（表面）

（裏面）

船形陶質土器（13-70）

A地点（後円部円丘檀東端）出土　陶質土器（その1）
（S.≒1/1）

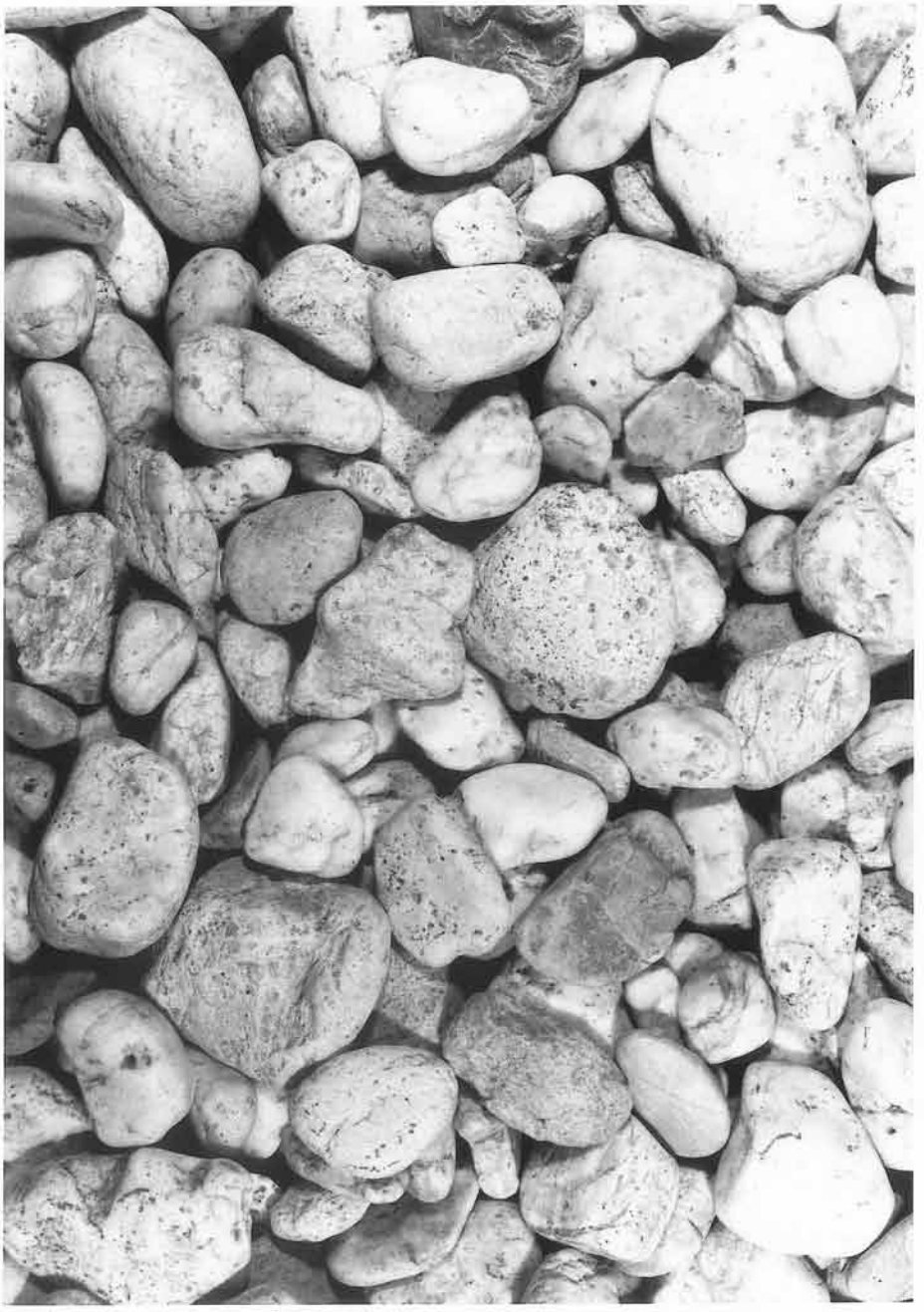


不明象形土器(13-71)

脚部(14-72)

脚付把手付壺(14-73)

A地点(後円部円丘檀東端)出土　陶質土器(その2)
(S.≒1/1)

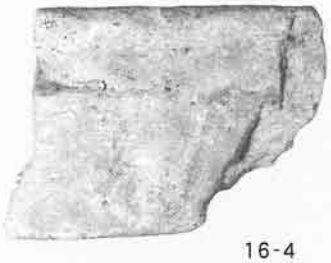


A地点（後円部円丘檀東端）ほか出土　白色円礫
（S.≒1/2）

16-1

16-2

16-3



16-4

16-6

16-5

16-7

16-8

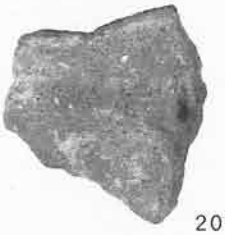
B地点(後円部北石室直上)出土　埴輪(S.≒1/3)

17-9

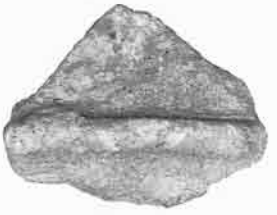
17-10

B地点（後円部北石室直上）出土　竜山石（S.≒1/2）

20-1

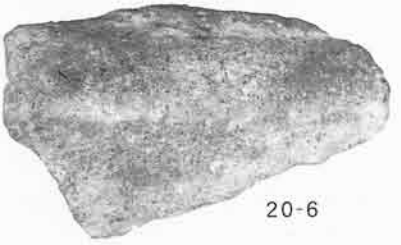


20-2



20-3

20-4

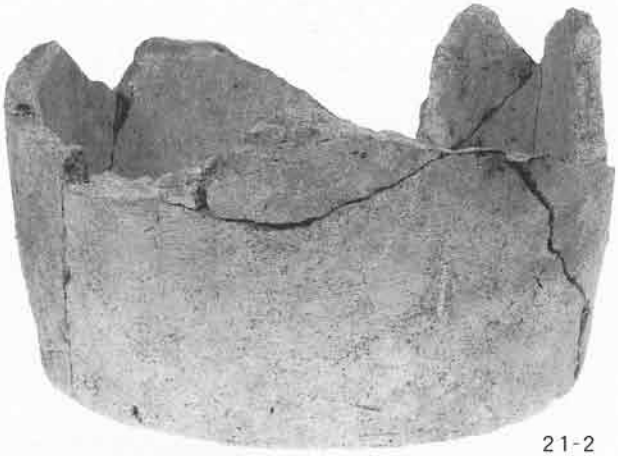


20-6

20-5

E地点（後円部北東斜面）出土　埴輪（S.≒1/3）

21-1



21-2

21-3

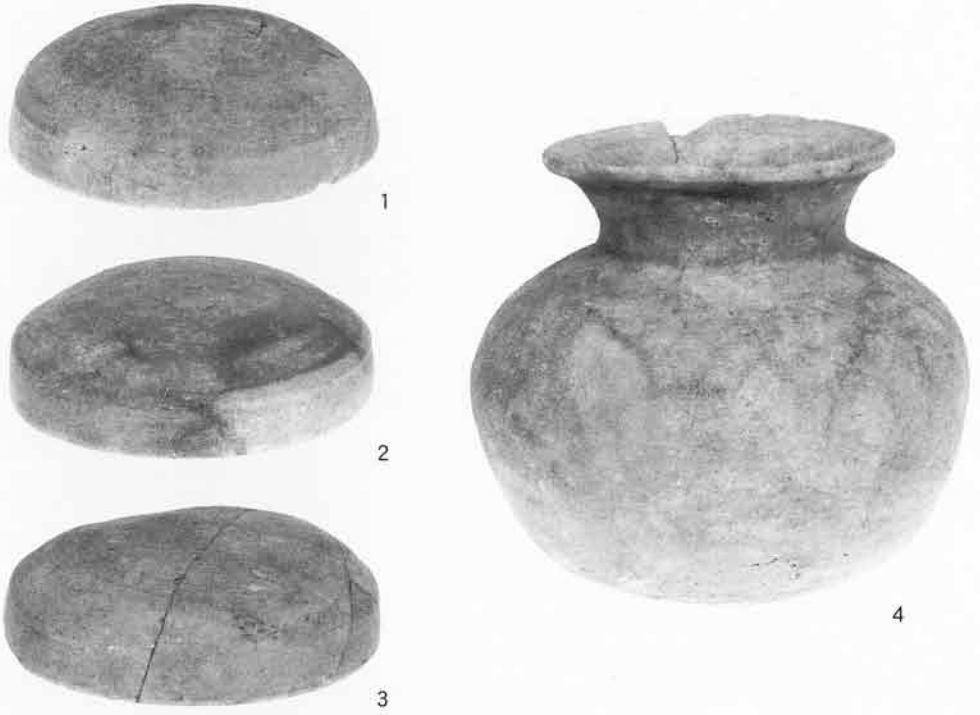
F地点（鞍部前方部寄り南端）出土　円筒・朝顔形埴輪（その1）
（S.≒1/3）

22-4

22-5

F地点（鞍部前方部寄り南端）出土　円筒・朝顔形埴輪（その2）
（S.≒1/3）

巨勢山303号墳　墳頂部の風倒木と遺物出土状況



巨勢山303号墳出土　須恵器(S.≒1/3)

報告書抄録

ふりがな	たいふう７ごうひがいによるむろみややまこふんしゅつどいぶつ
書名	台風7号被害による室宮山古墳出土遺物
巻次	
シリーズ名	御所市文化財調査報告書
シリーズ番号	第２４集
編著者名	藤田和尊・木許　守
編集機関	御所市教育委員会
所在地	〒639－2306　奈良県御所市三室１１７番地　　TEL 0745－62－3001(内412)
発行年月日	西暦　１９９９年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
室宮山古墳（むろみややま）	奈良県御所市（ならけんごせし） 大字室（だいじむろ）	29208		34度 26分 26秒	135度 44分 25秒	19980922～ 19990226		台風7号の被害のために、史跡指定地内で遺物が出土した。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
室宮山古墳	古墳	古墳時代 中期		陶質土器 形象埴輪 円筒埴輪 朝顔形埴輪 壺形埴輪 鉄剣 竜山石 白色円礫 グリーンタフ原石 閃緑岩	台風７号の被害で墳丘上の樹木が倒れその根に絡んで遺物が出土した。陶質土器など注目すべき遺物があった。

台風7号被害による
室宮山古墳出土遺物

御所市文化財調査報告書　第24集

平成11年（1999年）3月31日

編集・発行　御所市教育委員会
御所市三室117番地

印　　刷　㈱笹田印刷所
御所市今住16－3